

佐久市埋蔵文化財調査報告書第27集

枇杷坂遺跡群

上久保田向Ⅲ

長野県佐久市琵琶坂
上久保田向遺跡Ⅲ地区発掘調査報告書

1994. 3.

峠の釜めし本舗おぎのや
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書第27集

枇杷坂遺跡群

かみ く ほ た むかい
上久保田向Ⅲ

長野県佐久市琵琶坂上久保田向遺跡Ⅲ地区発掘調査報告書

1994. 3.

峠の釜めし本舗おぎのや
佐久市教育委員会

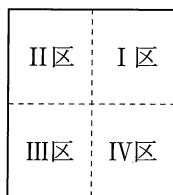
例 言

- 1 本書は、1992年9月28日～1994年3月31日にわたって発掘調査、整理された長野県佐久市大字琵琶坂字上久保田向に所在する枇杷坂遺跡群上久保田向Ⅲ遺跡の報告書である。
- 2 本調査は峠の釜めし本舗おぎのやのドライブイン建設に伴う工事により、埋蔵文化財の破壊が余儀なくされたためのものである。
- 3 発掘調査は佐久市教育委員会埋蔵文化財課が担当した。
- 4 本書は森泉かよ子が編集・執筆した。
- 5 本遺跡の出土遺物は佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称は次のとおりである。
H-住居址 F-掘立柱建物址 D-土坑 M-溝址 P-ピット
- 2 挿図の縮尺は次のとおりである。
遺構-1/80 カマド-1/40 遺物-1/4 一部異なる縮尺もあり。
- 3 挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを表す。
遺構 地山断面-斜線 焼土-砂目 柱痕-砂目極細 粘土-点
遺物 土器器面黒色処理-点 灰釉陶器-砂目極細
- 4 遺構の海拔標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。
- 5 土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいてしめた。

N



各区の設定は北を基準として四分し、反時計回りになっている。

目 次

凡例

例言

第I章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る動機	1
第2節 調査の概要	2
第3節 調査日誌	4
第II章 遺跡の立地と環境	4
第1節 自然環境	4
第2節 歴史環境	4
第III章 基本層序	5
第IV章 遺構と遺物	7
第1節 竪穴住居址	7
第2節 掘立柱建物址	69
第3節 土坑	91
第4節 溝状遺構	94
第V章 まとめ	95

引用参考文献

- 1 小平和夫1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－松本市その1－総論編』第3章第5節古代の土器
- 2 望月 映1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書－松本市その1－総論編』第3章第1節古代の竪穴
- 3 寺島俊郎1991『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2－佐久市内その2－』第18節1～3
- 4 原 明芳1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3－塩尻市内その2 吉田 川西遺跡』第7章第2節
「吉田川西遺跡における食器の変容」
- 5 堤 隆1989『根岸遺跡』「根岸遺跡における土器様相」
- 6 堤 隆1985『聖原II遺跡』第II章聖原II遺跡の環境
- 7 佐久市教育委員会1993『上久保田向IV』

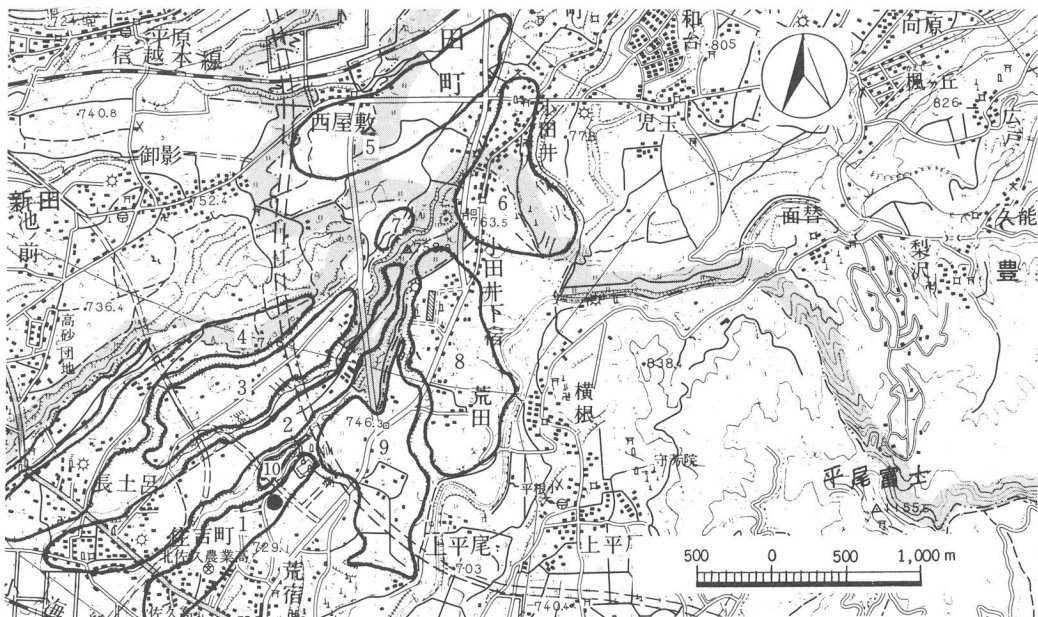
第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

上久保田向遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓の末端部にあたり、南西方向にのびる田切り地形の台地上にある。標高734～736mを測る。

本遺跡は、昭和62年度から上信越自動車道建設工事の仙祿湖インターのアクセス道路部分として調査され、平安時代の堅穴住居址が見つかっている（長野県埋文センター調査）。平成2年度の岩村田北部土地区画事業に伴う仙祿湖線・湖南線の道路工事に先だって発掘調査が実施され、「上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ」として堅穴住居址等が検出されている。

今回、平成4年になって当地に峠の釜めし本舗おぎのやのドライブイン建設が計画されたため、試掘調査したところ遺構が検出され、発掘調査が必要となった。峠の釜めし本舗おぎのやの委託を受けた佐久市教育委員会が調査を実施することとなった。



- 上久保田遺跡Ⅲ地区 1. 枇杷坂遺跡群 2. 長土呂遺跡群(聖原遺跡) 3. 芝宮遺跡群
- 4. 周防畑遺跡群 5. 鋳師屋遺跡群 6. 中金井遺跡群 7. 曾根城遺跡 8. 跡坂遺跡群
- 9. 栗毛坂遺跡群 10. 曾根新城

第 1 図 上久保田向遺跡の位置図・周辺遺跡分布図（1：50,000 国土地理院地形図）

第2節 調査の概要

遺跡名 枇杷坂遺跡群 上久保田向遺跡Ⅲ（BK KⅢ）

所在地 佐久市大字岩村田字上久保田向213他

調査期間 1992年9月28日～1994年3月31日

調査面積 約1200㎡

調査委託者 群馬県碓氷郡松井田町大字横川297-1
株式会社おぎのやドライブイン

調査組織 佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教 育 長 大井季夫

教 育 次 長 奥原秀雄

埋蔵文化財課長 上原正秀

管 理 係 長 桜井牧子（平成4年3月退職）
小林泰子（平成4年4月着任）

埋蔵文化財係長 草間芳行

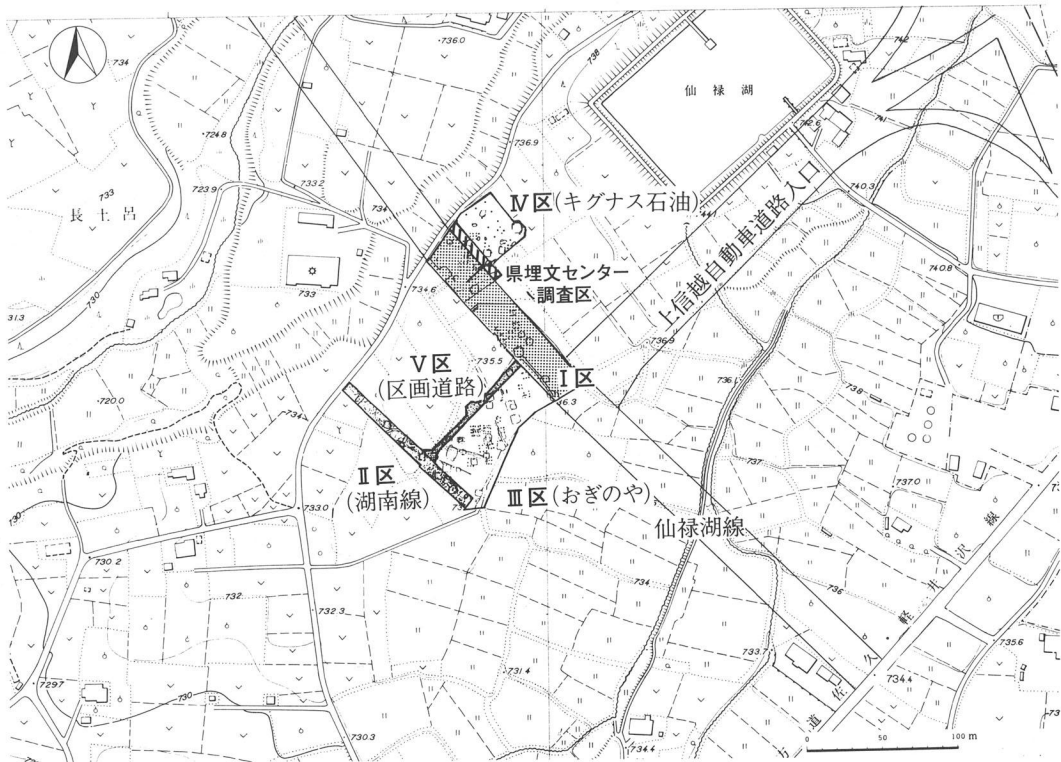
埋蔵文化財係 林 幸彦 高村博文 三石宗一 須藤隆司
小林眞寿 羽毛田卓也
富沢一明 上原 学（平成4年度より）

調査担当者 林 幸彦

調査主任 佐々木宗昭・森泉かよ子

調 査 員 井上行雄・五十嵐勝吉・池田豊子・井出愛子・井出つねじ
大井キセ・小田川 栄・小田川時江・神津よしの・小須田サクエ
棚沢三之助・篠崎清一・篠原昭子・清水佐知子・清水六郎
関口 正・東城とも子・徳田代助・角田すず子・角田 時
角田トミエ・角田良夫・花里八重子・花里よしの・原 キミエ
星野良子・堀籠滋子・村松とみ子・茂木とよ子・森泉欽一
山崎 直・桃井もとめ・柳沢豊志子・柳沢千賀子・依田福男

報告書作成分担 土器実測 橋詰勝子・堺 益子
土器復元 小田川 栄・清水佐知子・角田 時・角田良夫
星野良子・橋詰けさよ
図面修正 堀籠滋子
トレース 篠原昭子・茂木とよ子・柳沢千賀子・木内明美



第2図 上久保田向遺跡各地区設定図（1：5,000）

I 区 仙祿湖線道路工事に伴う調査

- （平成元年） 竪穴住居址 3 棟、掘立柱建物址 5 棟、溝状遺構 3 本
- （平成 2 年） 竪穴住居址 6 棟、掘立柱建物址 4 棟、溝状遺構 1 本
- （平成 4 年） 竪穴住居址 1 棟、掘立柱建物址 2 棟、溝状遺構 2 本、土坑 3 基

II 区 湖南線道路工事に伴う調査

- （平成 2 年） 竪穴住居址 2 棟、掘立柱建物址 3 棟、土坑 1 基
- （平成 4 年） 竪穴住居址 2 棟、掘立柱建物址 3 棟、溝状遺構 4 本、

III 区 おぎのやドライブイン建設工事に伴う調査（本報告書）

- （平成 4 年） 竪穴住居址17棟、掘立柱建物址21棟、溝状遺構 4 本、土坑 7 基

IV 区 キグナス石油株式会社ガソリンスタンド建設工事に伴う調査

- （平成 4 年） 竪穴住居址 6 棟、掘立柱建物址 6 棟、溝状遺構 1 本、土坑 7 基

V 区 土地区画事業区画道路に伴う調査

- （平成 3 年） 竪穴住居址 1 棟
- （平成 4 年） 竪穴住居址 4 棟、掘立柱建物址 4 棟、溝状遺構 3 本

長野県埋蔵文化財センター調査区 上信越自動車道アクセス道路部分

- （昭和63年） 竪穴住居址 3 棟、掘立柱建物址 1 棟、溝状遺構 4

第3節 調査日誌

1992. 6. 24～26 試掘調査
1992. 9. 8～29 重機による表土剥ぎ
1992. 9. 28～10. 8 遺構プラン確認。機材の搬入
1992. 10. 9 遺構の検出、掘り下げ、実測作業開始。
1992. 11. 28 空中撮影・測量（朝日航洋社）。
1992. 12. 10・11 現地における作業を終了。機材撤収。
1992. 1. 4～1994. 3

遺物の洗浄、注記、図面修正等に着手。

土器の復元、土器の実測、トレース、遺物の写真撮影等を行い、報告の編集、原稿の執筆をして刊行する。

第II章 遺跡の立地と環境

第1節 自然環境（第1図）

浅間山の噴出物である降下火山灰砂が堆積し、生活地表面をなしている地質範囲のため、水の侵食を受け流出し易く、田切り地形が発達している。台地上には集落を中心とした遺跡が分布し、田切りは浅間山麓の湧水の流下流路となって、濁川をはじめとして標高750m以下の稲田耕作を支えてきたと考えられる。（1990・白倉盛男）

第2節 歴史環境（第1図）

本遺跡の周囲は上信越自動車道が開通し、佐久インターが当地に設けられたことにより開発が盛んな地域である。また遺跡の分布は第1図に記載してあるように、台地の全面に分布している所である。すぐ北の台地には聖原遺跡があり、佐久流通業務団地造成事業に先だって発掘調査されることになり、平成4年現在までの4年間にわたり7万㎡以上の調査が進み、竪穴住居址799棟、掘立柱建物址663棟等を検出している。古墳から平安時代にかけての大集落であり、細長い台地上全面に広がっている。さらに北の台地に芝宮遺跡があるが、やはり同様の集落が広がっている。さらに北の小田井地区にある鋳師屋遺跡群は、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落であるが、

多数の馬骨の出土から、『延喜式』にある御牧・塩野牧、東山道長倉駅に関わった人々の集落ではないかという遺跡である(1985 堤 隆)。

当枇杷坂遺跡群の南には弥生時代後期の集落の清水田遺跡、上直路遺跡があり、東隣には周防畑遺跡があり、弥生時代後期・奈良・平安時代の集落である。

本遺跡の北側には古墳中期の以降の集落が展開し、南側には弥生時代後期の集落が見られる。しかし、上久保田向遺跡では今のところ弥生・古墳時代の遺構は検出されず、縄文時代の狩猟用の陥し穴があるのみで、平安時代まで開発されなかった地域であると言える。

第三章 基本層序

第I層 黒褐色土(耕作土)(10Y R2/3)

第II層 黒色土(10Y R2/1)

粒子細かい緻密土

第III層 暗褐色土(10Y R3/3)～褐色土(10Y R4/

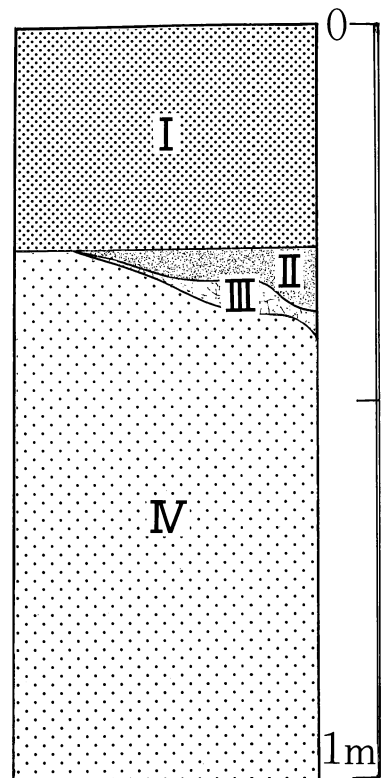
6) 5mm～1cm大のパミス粒含む。

第IV層 黄褐色土(10Y R5/6)

5mm～1cm大のパミス粒を多量含む。

第IV層の下層は明黄褐色土(10Y R7/6)

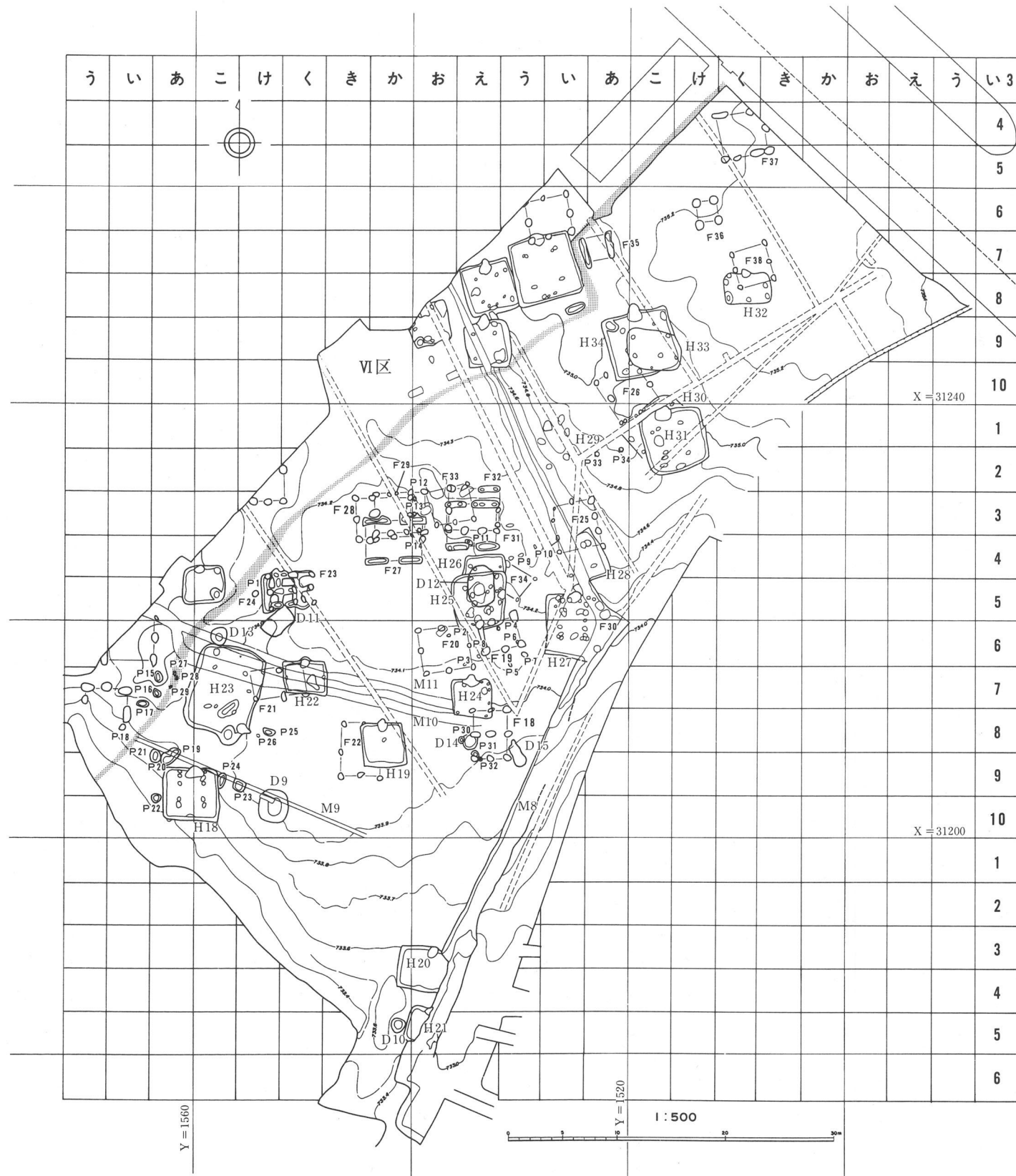
パミス上層より少ない。



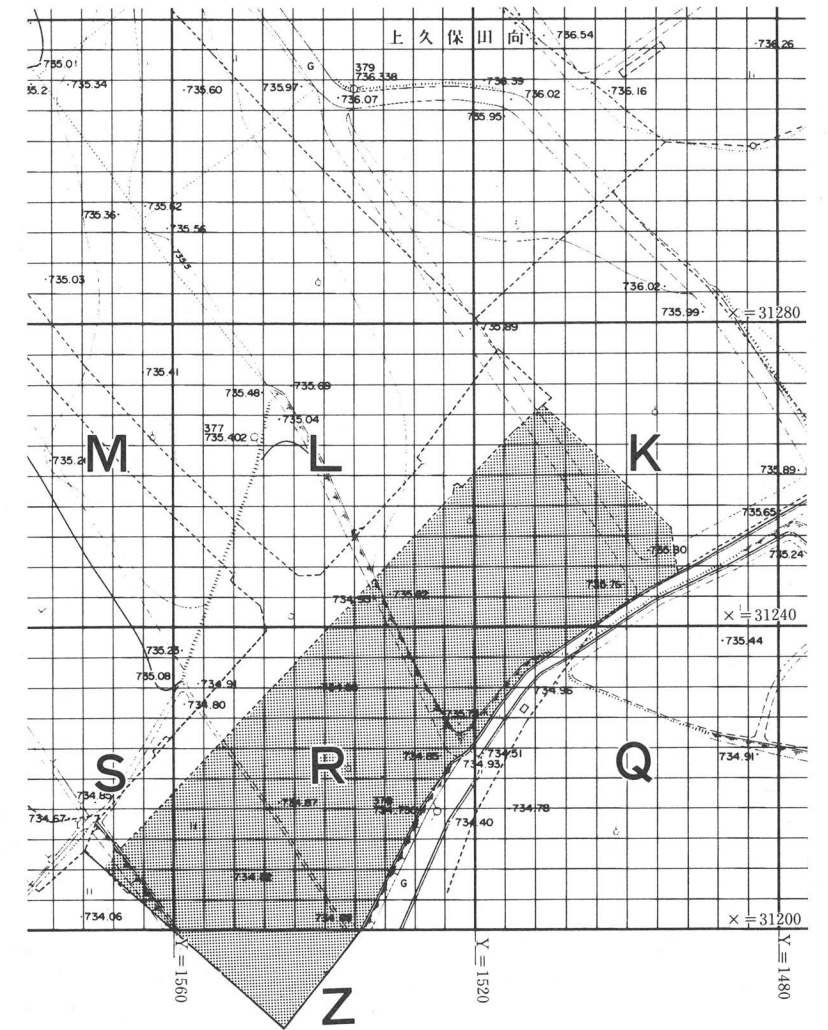
第3図 基本層序模式図

耕作土除去下には第II層の黒色土がほぼ全体に堆積しており、遺構確認面である。その下層は影響されてローム層がくすんでいる。調査区西側の台地が下がる傾斜面では、部分的に第II層上面に砂層が堆積し、遺構覆土となっていた。

近年、所有者が水田を果樹栽培に切替え、果樹栽培のための排水溝が縦横に走っており、調査時に煩雑さを増した。



第4図 上久保田向遺跡Ⅲ地区全測図(1:500)



第5図 発掘区設定図

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) H18号住居址

遺構（第6・7図、写真2～4）

調査区の西端Rこー9グリットにあり、全体層序第II層で検出された。規模は4.8×4.4mのいくらか東西に長いほぼ方形を呈する住居址である。主軸方向はN-0°を指している。北東隅をM9号溝状遺構にわずか切られているが良好な状態で残っていた。覆土は黒褐色土と黒色土であった。床面は非常に堅く、黄褐色土ロームと黒褐色土の混ざった土を入れて叩き締めていた。北から東・南壁にかけて周溝がある。床下は中央部を掘り残し、周縁部を幅40cm深さ12cm程掘り窪め黒褐色土を入れている。

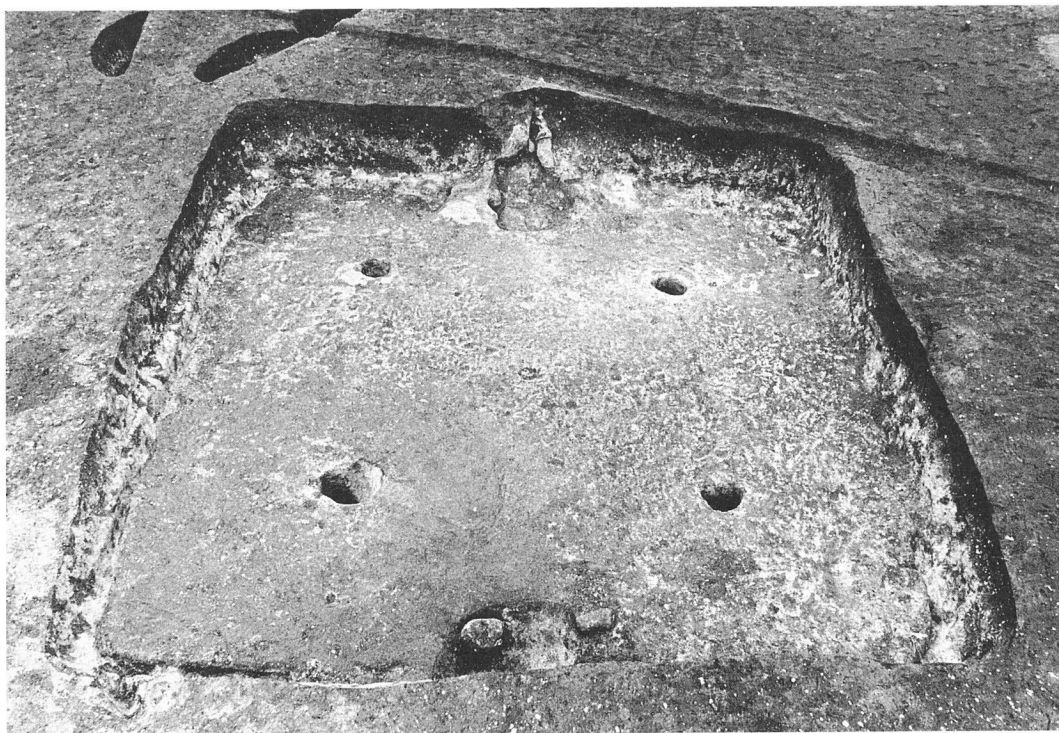
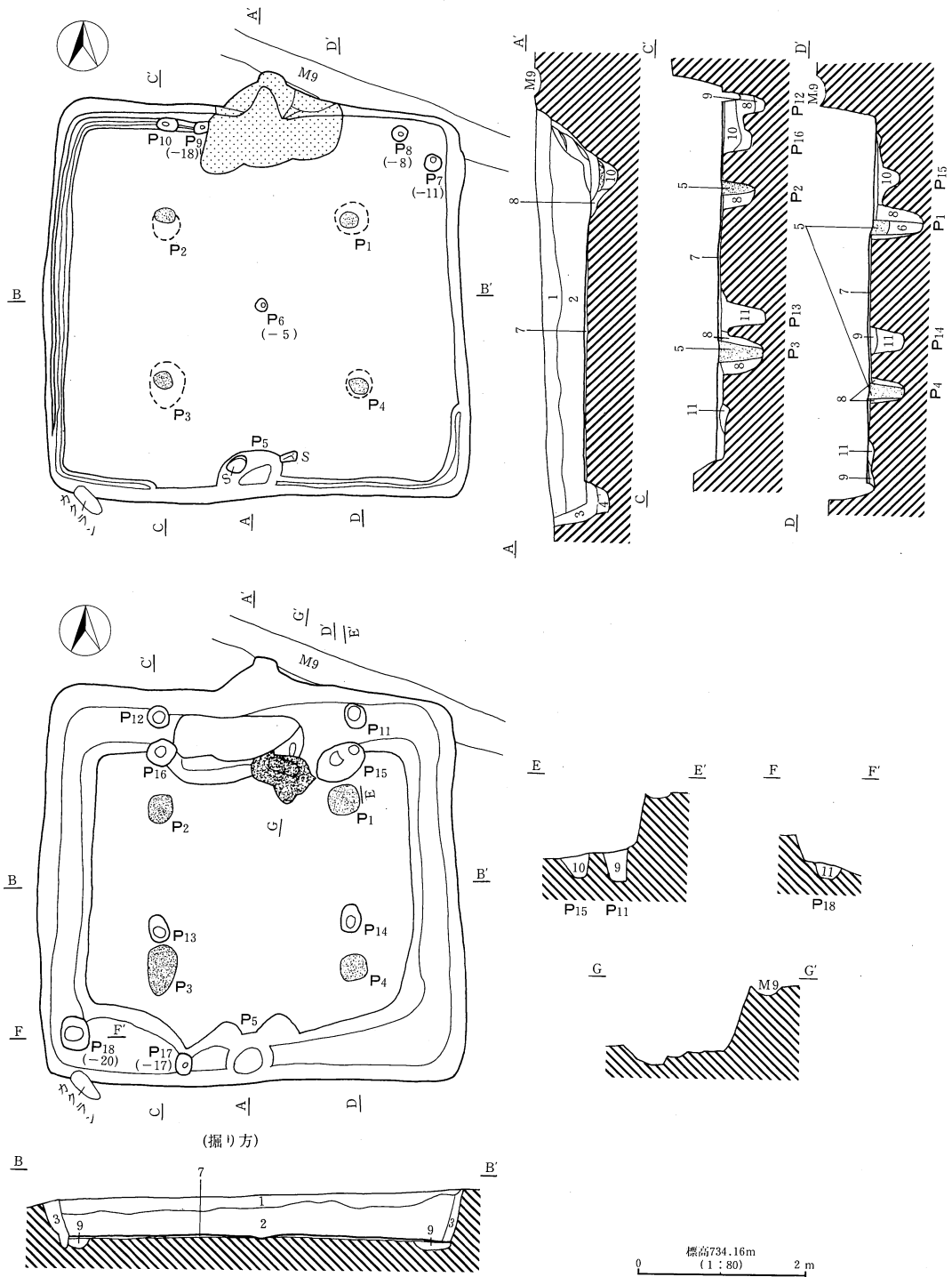


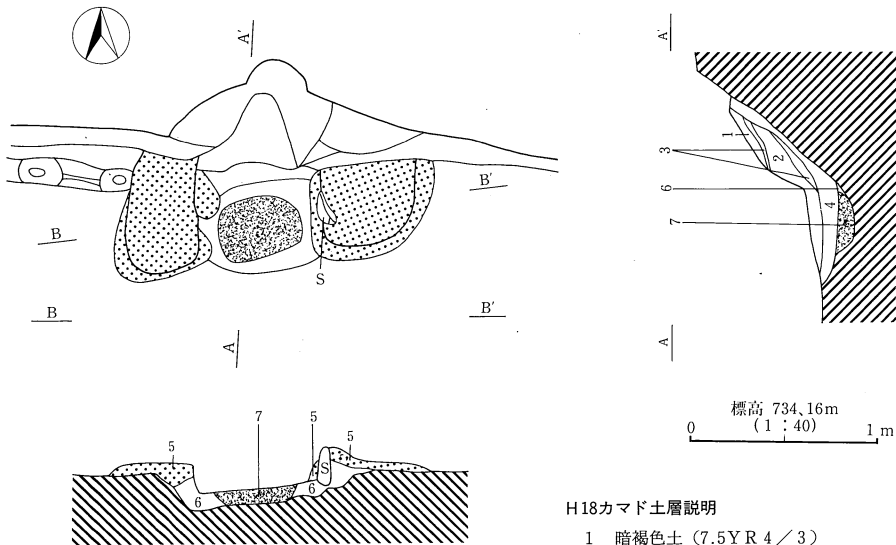
写真1 H18号住居址。生活面を出した状態。北壁中央にカマドが残っていた。床面はよく叩き締められ、柱の太さや出入口のピットもよくわかった。(南より)



第6図 H18号住居址実測図

H18土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 (10YR 2/2)
パミス、小石が微量混入。</p> <p>2 黒色土 (10YR 2/1)
パミス、小石を多量に含む。</p> <p>3 黒褐色土 (10YR 2/3)
ローム粒子微量混入。</p> <p>4 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム多く含む。しまりなし砂質。</p> <p>5 黒褐色土 (10YR 2/3)
柱痕。パミス及びローム粒子を少量含む。しまりなし。</p> <p>6 黄褐色土 (10YR 5/6)
柱痕。パミスを少量含む。</p> | <p>7 黒褐色土 (10YR 2/2)
黄褐色ロームに黒褐色土を含み非常に堅く叩き締められた床面。</p> <p>8 黄褐色土 (10YR 5/8)
黄褐色ロームに黒色土わずかに含む。それ程しまっていない。</p> <p>9 褐色土 (10YR 4/4)
黄褐色ロームに褐色土ブロック含む。</p> <p>10 黒褐色土 (10YR 2/3)
パミス粒、ローム粒子含む。</p> <p>11 黄褐色土
黄褐色ローム。しまりなし。</p> |
|--|---|



H18カマド土層説明

- | |
|--|
| <p>1 暗褐色土 (7.5YR 4/3)
ローム、粘土含む。</p> <p>2 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
ローム、パミス粒含む。黒色土含む。</p> <p>3 にぶい赤褐色土 (5YR 5/4)
粘土層。</p> <p>4 暗赤褐色土 (5YR 3/3)
焼土を多量に含む、上面に炭化物を含む。灰層もあり。</p> <p>5 にぶい褐色土 (7.5YR 5/4)
粘土。</p> <p>6 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
細かいパミス粒・ローム含む。しまりなし。</p> <p>7 明赤褐色土 (5YR 5/8)
焼けたローム。</p> |
|--|

第7図 H18号住居址カマド実測図

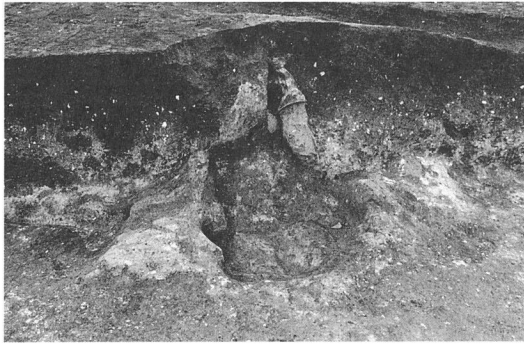


写真2 カマドはにぶい褐色粘土で築き、煙道に甕を利用していた。(南より)



写真3 カマドを築く前の掘り込み。(東より)

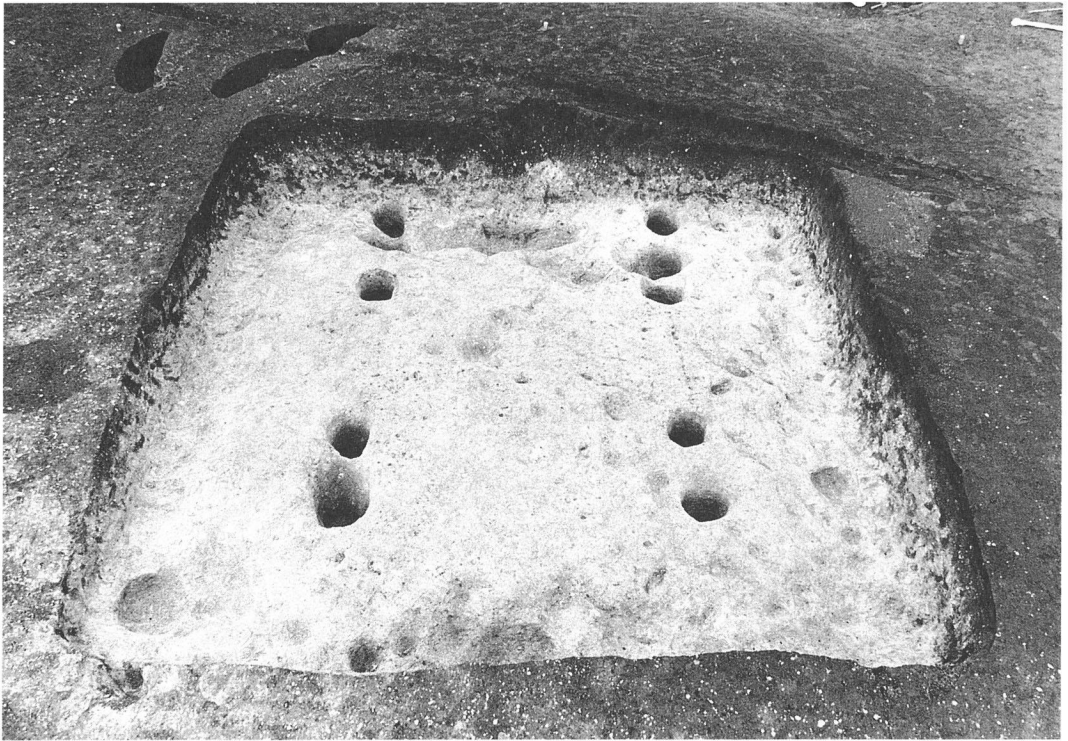


写真4 床面を剥いで最初に掘り込んだ状態をみる。北に他の柱穴が見つかり、カマドのやや南に旧カマドらしい焼土範囲があった。(南より)

主柱穴は4個あり、柱痕がはっきりわかった。掘り方で径32~40cm、深さ40~60cmの穴に径22cmの柱痕が観察された。掘り方でさらに6個の柱穴が検出され、生活面で使用された柱から北に40cm程平行移動した位置にあり、この住居址が建て替えられたものであることがわかった。入り口施設にかかわるピットが南壁下にあり、長径70cm短径40cm深さ26cmを測る。床下土坑はなかったがP18は名残かもしれない。

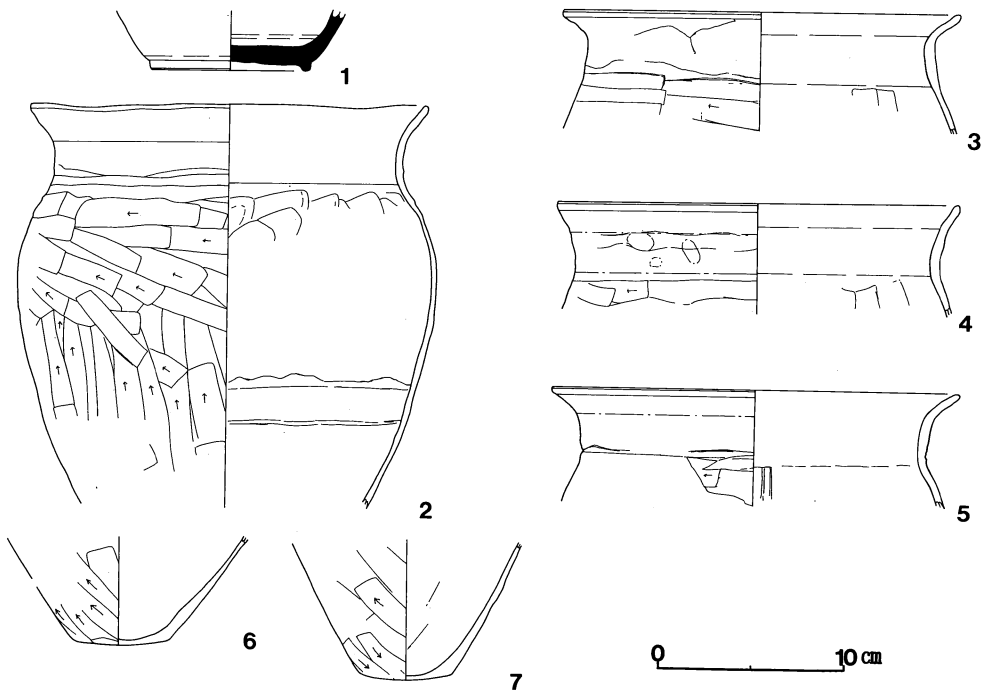
カマドは北壁中央にあり、カマドの両袖基部と煙道の一部が残っていた。カマドの天井部は除去されてなかった。奥行き110cm、幅166cmを測り、煙道は約50°で立ち上がる。火床部はよく焼けていた。その火床部の幅をきめる位置に軽石を両方においてにぶい褐色粘土で構築している。煙道からは使用状態のままではないが武蔵甕が出ており、煙道出口に甕を利用したものと思われる(8図-2・5・7)。また床下からは旧カマドの火床部が残り、焼土がみられた。

遺物(第8図、図版)

良好な状態で検出されたのにもかかわらず遺物は少ない。遺物は土器類の須恵器と土師器がある。他に210gの鉄滓が出土している。

須恵器は軟質の杯片、かえりが丸い杯蓋片があり、土師器は内面ミガキ黒色処理された杯片などがある。図示できたのは高台の付く須恵器杯と武蔵型甕と言われる薄手の土師器の甕である。甕はカマドの構築材であり、口縁部形が「コ」字を呈するものである。

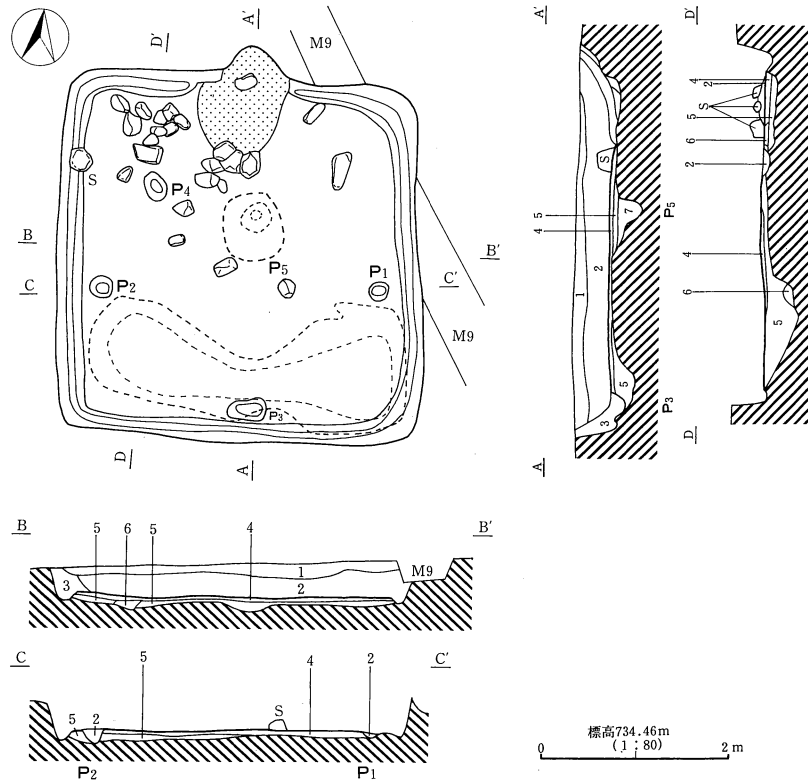
これらより本址は9世紀後半に位置づけられるものと思う。



第8図 H18号住居址出土遺物実測図

2) H19号住居址

遺構 (第9・10図、写真5～8)



H19土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 (10YR 2/3)
バミス、小石、ローム粒子が混入。</p> <p>2 黒色土 (10YR 2/1)
バミス、小石を多量に含み、少量の炭化物が混入。</p> <p>3 黒褐色土 (10YR 2/2)
ロームブロックが微量混入。</p> | <p>4 黒褐色土 (10YR 2/3)
貼り床。 にぶい黄橙色粘土を敷き、ロームブロックも含む非常に堅い床面。</p> <p>5 黒色土 (10YR 1.7/1)
緻密土。</p> <p>6 黒褐色土 (10YR 3/2)
ロームブロック、黒色土ブロック混じる。</p> <p>7 明黄褐色土 (10YR 7/6)
しまりなし。黄褐色ロームが入る。</p> |
|--|---|

第9図 H19号住居址実測図

西端のRか-8グリットにあり、F22号掘立柱建物址を切る。全体層序第III層褐色土で検出され、大半がロームを切り込んでいるので把握し易かった。北東隅上面を排水溝に切られている。

カマドを北に、主軸方位はN-7°-Wを指す。覆土は黒褐色土と黒色土である。

規模は3.9×3.6m深さ40cmを測り、東西に少し長いほぼ方形を呈する住居址である。

床面は非常に強く締まっており、にぶい黄橙色の粘性のあるロームを敷いている。北側床面にはカマドの構築材である焼けた軽石が散在していた。支柱穴は明確でなく、南寄りの東西壁下に



写真5 H19号住居址。北壁中央にカマドがあり、北側の床面にはカマドの構築材である軽石が散在していた。カマドの西には円形に礫群がある。これは4個の軽石製の支脚がまとまって出土している。支脚の置き場か。(南より)

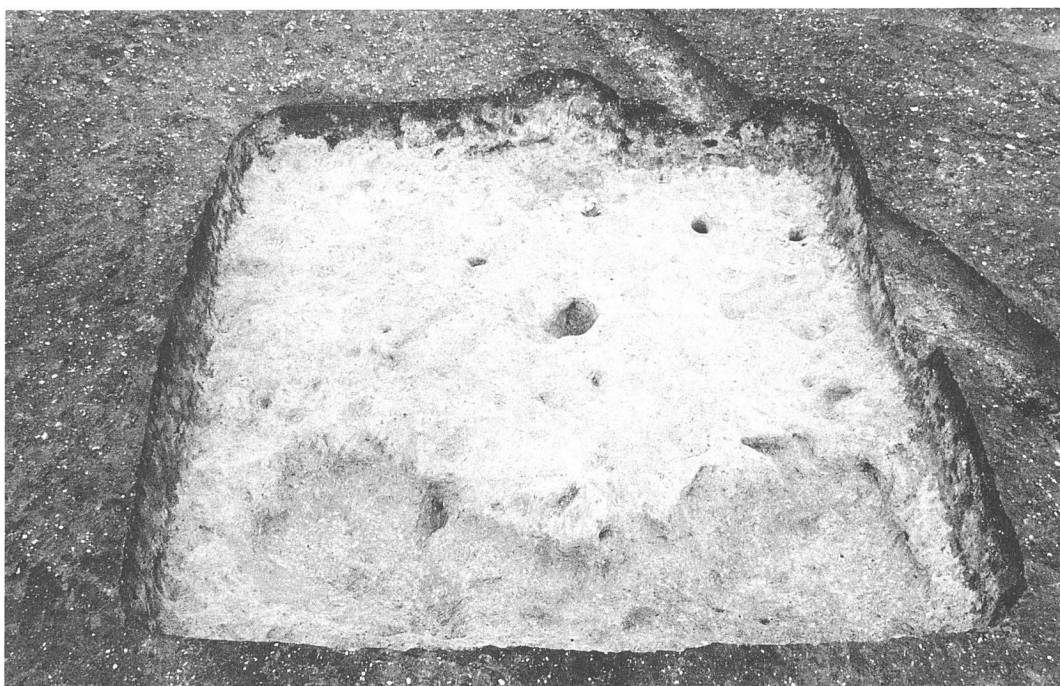


写真6 貼っていた床面を下げると南壁下には掘り込み、中央にはピットがあった。(南より)



写真7 カマドの崩れた上部を除いて火床部を出した状態。(東より)

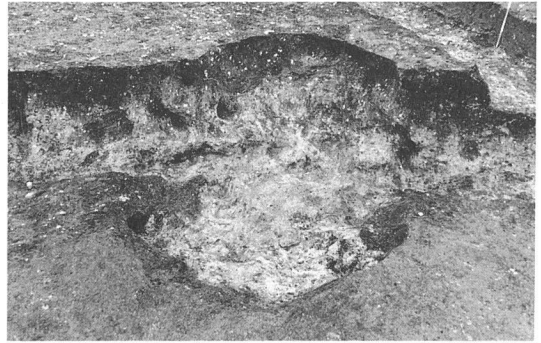
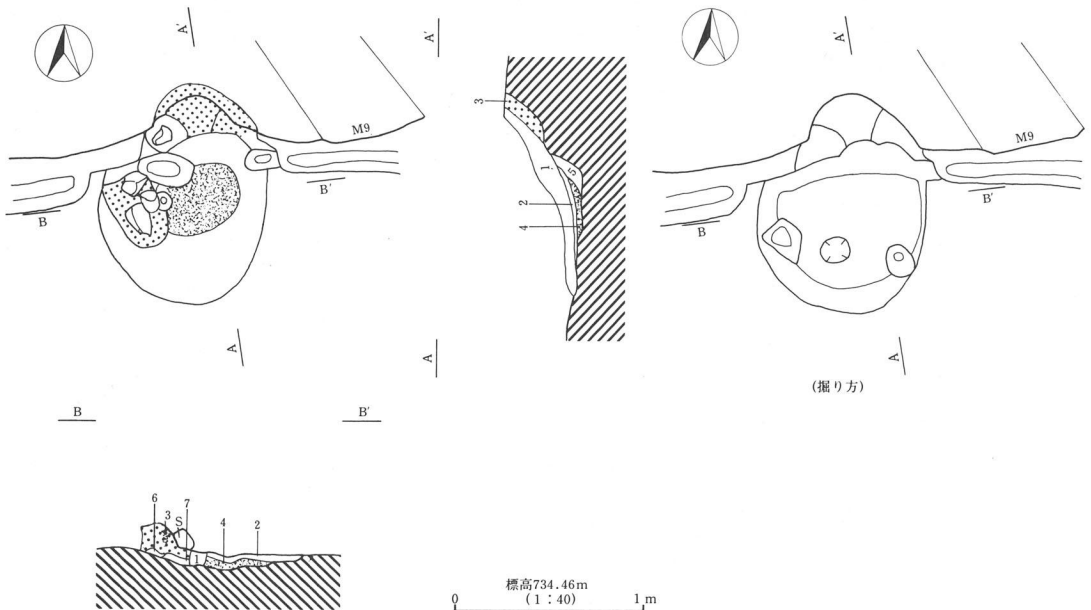


写真8 カマドを構築する前の掘り込み。(南より)



H19カマド土層説明

- | | |
|------------------------------|------------------------------------|
| 1 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
焼土を含む。 | 5 褐色土 (7.5YR 4/6)
地山のロームが焼けている。 |
| 2 暗赤褐色土 (5YR 3/6)
灰を多く含む。 | 6 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
粘土粒含む。 |
| 3 にぶい褐色土 (7.5YR 5/4)
粘土層。 | 7 極暗褐色土 (7.5YR 2/3)
黒色土含む。 |
| 4 明赤褐色土 (5YR 5/8)
焼土層 | |

第10図 H19号住居址カマド実測図

径20cm深さ6cmと16cmの浅い円形ピットがあったのみである。出入口のピット (P 3) が南壁下にあり、長径40cm深さ10cmを測る。周溝がカマドを除いた壁下を全周している。床下は南側だけ20cm深く掘り下げ、黒色土を入れている。住居址の中央に径30cm深さ30cmの柱痕を持つピットが

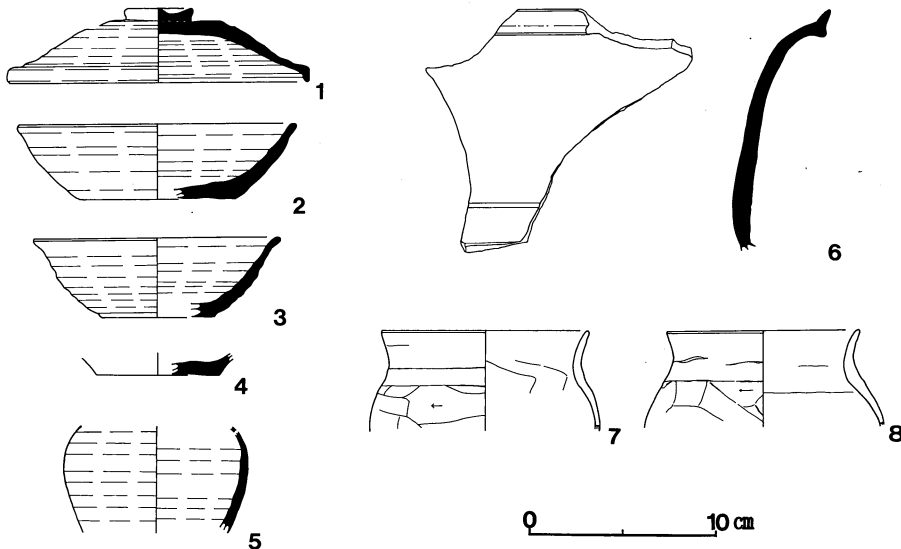
検出された。

カマドは崩壊しており、煙道下面・左袖・火床部が残る。奥行き110cm幅90cm、煙道の立ち上がり角度約40°を測る。カマドは床面に散在していた軽石や砂岩多用し、にぶい褐色粘土で構築したものであったと推測される。火床部には灰、焼土が残り、良く焼け込んでいた。

遺物（第11図、図版）

土器類のみで出土量は少ない。土師器では武蔵甕大・小があり、須恵器は大甕の口縁部・杯蓋・杯・短頸壺の胴部がある。須恵器杯は軟質である。

これらより本址は9世紀後半の住居址であろう。



第11図 H19号住居址出土遺物実測図

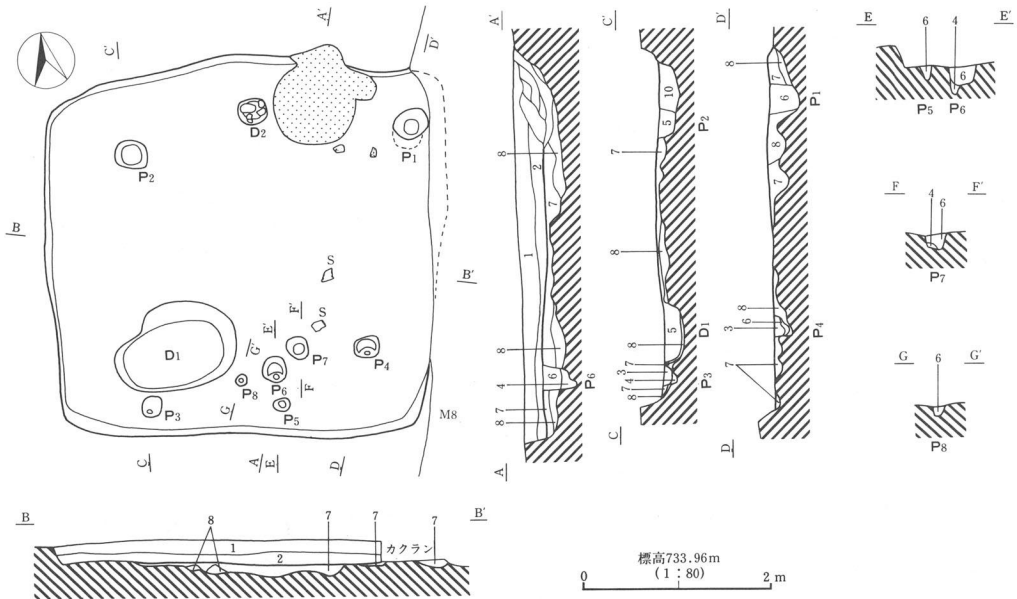
3) H20号住居址

遺構（第12・13図、写真9～12）

調査区南西端にあり、Zおー3グリットに位置する。全体層序第II層黒色土中で検出され、暗褐色土中に構築されている。M8に東壁と東端床面を壊される。

規模は4.0×3.8mを測り、東西にいくらか長いほぼ方形を呈している。壁は20cm残る。主軸方位はN-7°-Eを指し、北壁中央より東寄りにカマドを持っている。覆土は黒褐色土と小石を含む黒色土である。床面は砂粒を含む黒褐色土が叩きしめられていた。南壁側とM8の影響をうけたところは明確な床面がつかめなかった。床下は中央を残して周溝状に20cm程窪めている。生活面も掘り方も黒褐色土に構築しているため掘りすぎがちである。柱穴も四隅にあるP1～P4で

あると思われるがP1を除いては浅いものである。南壁下にも4個の小ピットがある。土坑は南西床面にあり、楕円形で長径130cm深さ23cmを測る。カマドの西には径32cm深さ12cmの円形ピットがある。上面に焼けた軽石、その下に粘土と多量の灰を含むものである。下面は締まっており、掘り方では径60cm深さ30cmの掘り込みとなった。



H20土層説明

- | | |
|--|--|
| <p>1 黒色土 (10YR 2/1)
バミスを少量混入する。</p> <p>2 黒色土 (10YR 1.7/1)
バミス、小石を多量に含み少量の炭化物が混入。</p> <p>3 黒褐色土 (10YR 2/2)
細かい砂粒含む。</p> <p>4 暗褐色土 (10YR 3/4)
ローム多く含む。</p> | <p>5 黒色土 (10YR 2/1)
小石を多く含む。</p> <p>6 黒褐色土 (10YR 2/3)
砂質</p> <p>7 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
貼り床。細かい砂粒を多く含む。堅められている。ロームブロック混。</p> <p>8 褐色土 (10YR 4/4)
ローム主体に黒褐色土混。</p> |
|--|--|

第12図 H20号住居址実測図



写真9 生活面を出した状態。黒色土に構築。全体を明確につかめない。(西より)

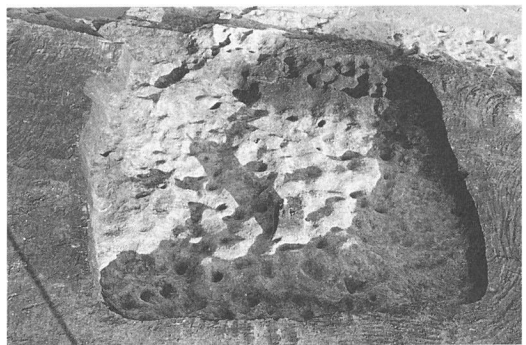
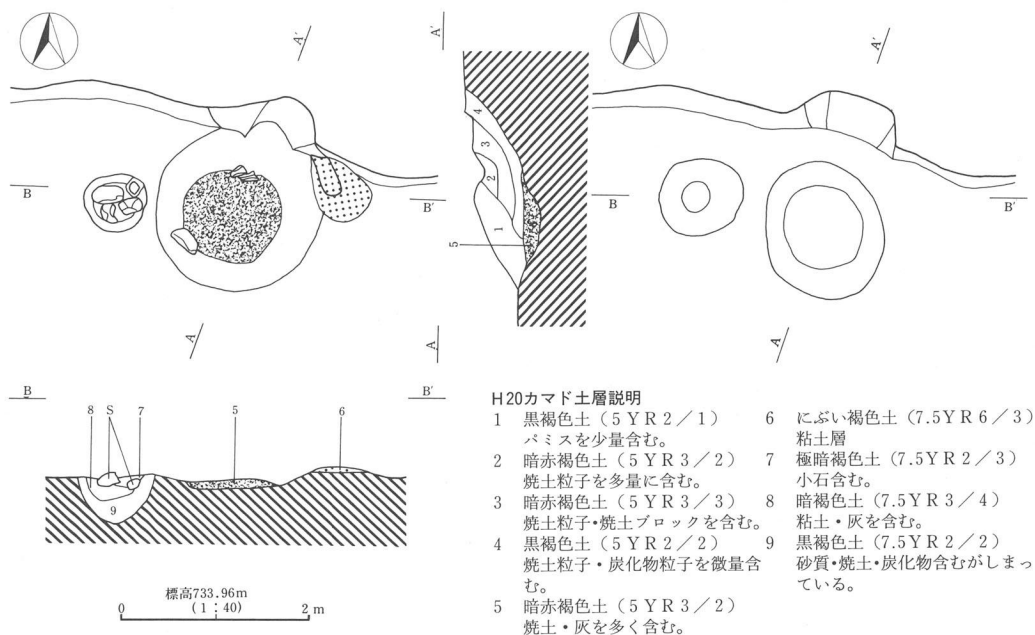


写真10 掘り方。確実にはつかめなかった。(西より)



第13図 H20号住居址カマド実測図



写真11 カマドの崩壊した上部を除いて火床部と袖を出した状態。(南より)



写真12 カマド構築前の掘り込み。(南より)

カマドは北壁の中央より東に寄っており、上部は押しつぶされた状態であった。奥行き100cm幅110cm、煙道の立ち上がり角度30°である。火床部には焼土と灰が多量に残っていた。

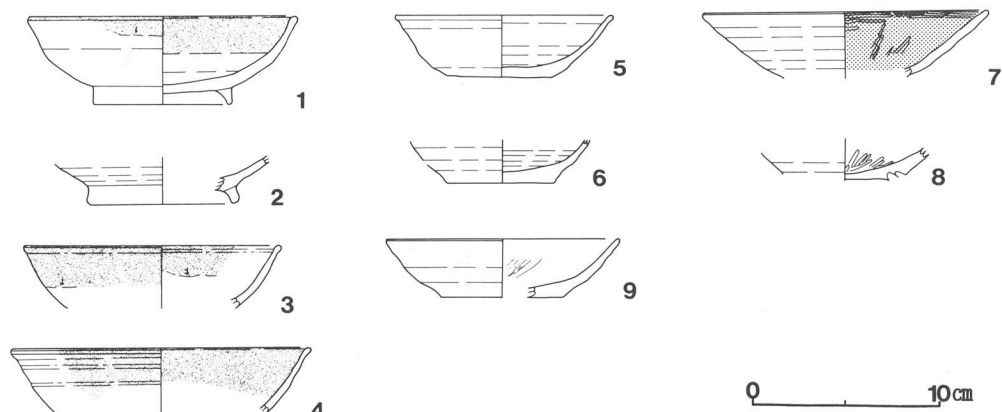
遺物 (第14図、図版)

遺物の量は少ない。灰釉陶器・須恵器・土師器がある。住居址の南東床面にはすり面のある20cm大の鉄平石があった。

灰釉陶器はいずれも楕形で、高台形が三日月形とそれがやや崩れたものがある。釉は浸け掛けである。須恵器は図示できるものはなく、壺・甕の胴部片、高台付き杯、杯がある。土師器は武蔵甕片1片と足高台杯、杯、楕形土器がある。図示した5・6の杯は砂粒を含み、内面がロク

ロナデ調整のままのものである。9は床下から出土し、いくらか内面にミガキ調整を施している。碗類は内面ミガキ黒色処理される7とミガキのみの8がある。

東寄りのカマド、ナデ調整のみの土師器杯等の存在から本住居址は10世紀前半に営まれたものと思われる。



第14図 H20号住居址出土遺物実測図

4) H21号住居址

遺構 (第15・16図、写真13~15)

南東端にあり、H21の南、Zおー5グリットにある。M8の用水により、東側半分が壊されている。全体層序第II層黒褐色土で検出された。南北3.0m深さ20cmを測り、主軸方位N-18°-Eを指す。カマドは北壁に設けられているが、やはり溝により東側が壊されている。

覆土は黒褐色土である。床面は黒褐色土をいくらか叩き締めているが、全体的には軟弱である。床下も掘り込んではいるが確実なところはつかめなかった。柱穴も隅近くに小ピットがあるが浅いものである。

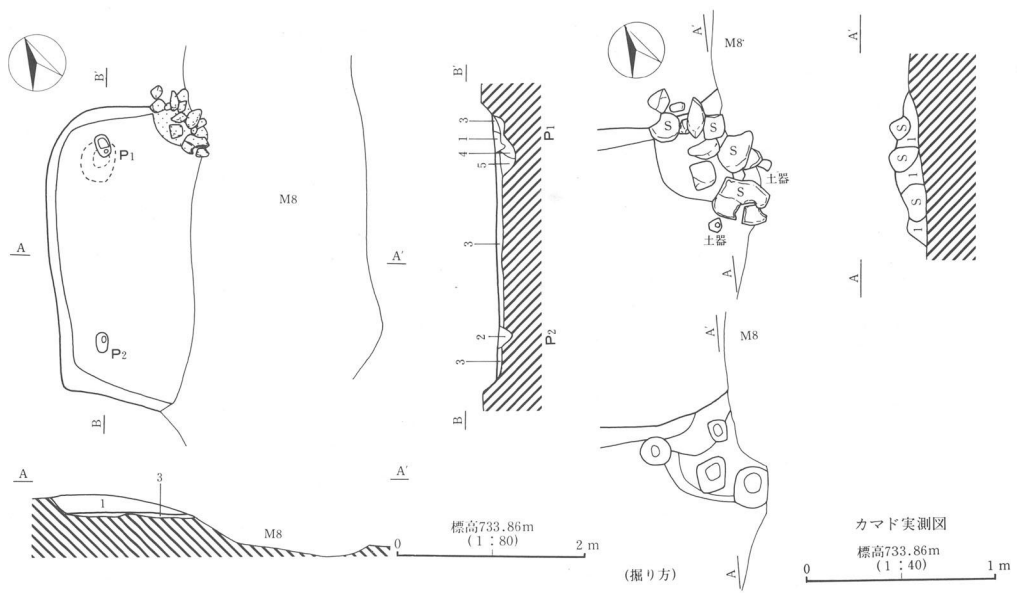
カマドは半分残るだけであったが、多くの焼けた軽石が集中した状態で検出された。奥行き60cmを測る火床部を持つものである。

遺物 (第17図、図版)

出土量はごく少量である。鉄製の紡錘車出土している。土器は、須恵器と土師器がある。

須恵器は平行叩き目の甕胴部片と杯底部がある。杯は底にヘラ記号がある。土師器は口縁部「コ」の字形の武蔵甕と判読不可能な墨書がある杯形土器がある。

これらより、本住居址は9世紀末に営まれたものと思われる。



H21土層説明

- 1 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
小砂利多く含む。粘性あり。
- 2 黒褐色土 (10Y R 2 / 2)
粘性あり。砂粒含む。
- 3 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
貼り床。パミス、ロームブロック混。

- 4 黒褐色土 (10Y R 3 / 2)
ローム粒子多く含む。
- 5 黒褐色土 (10Y R 2 / 2)
細かいパミス粒含む。

H21カマド土層説明

- 1 極暗褐色土 (7.5Y R 2 / 3)
焼土粒子含む。

第15・16図 H21号住居址・カマド実測図

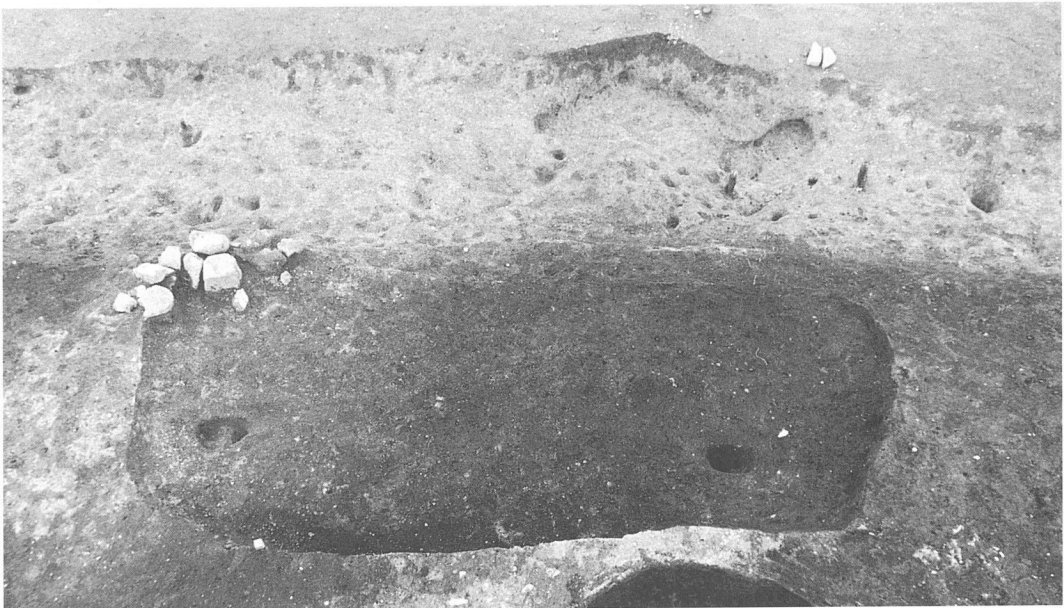


写真13 H21号住居址。M8に東側を壊されている。左上にカマドの焼けた石が残る。床面は全体に軟弱であった。(西より)



写真14 石を取り除いてカマドの掘り方を出した状態。(南より)

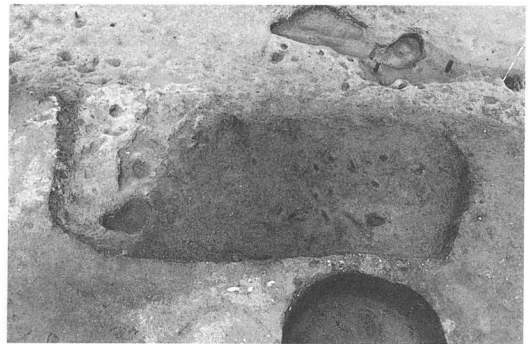
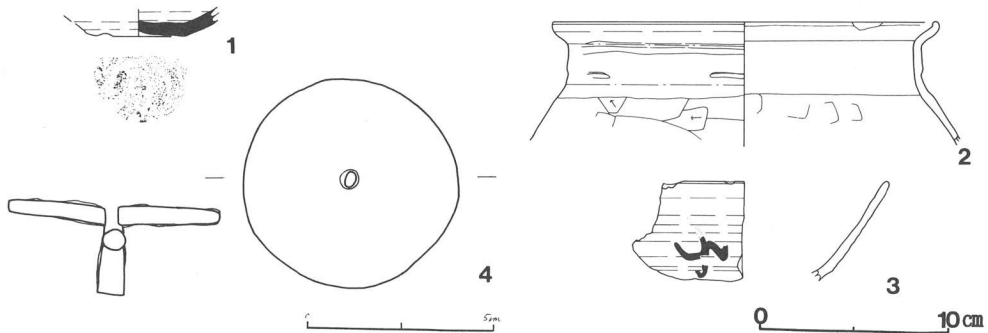


写真15 H21号住居址掘り方。地山が黒色で確実なところはわからない。(西より)



第17図 H21号住居址出土遺物実測図

5) H22号住居址

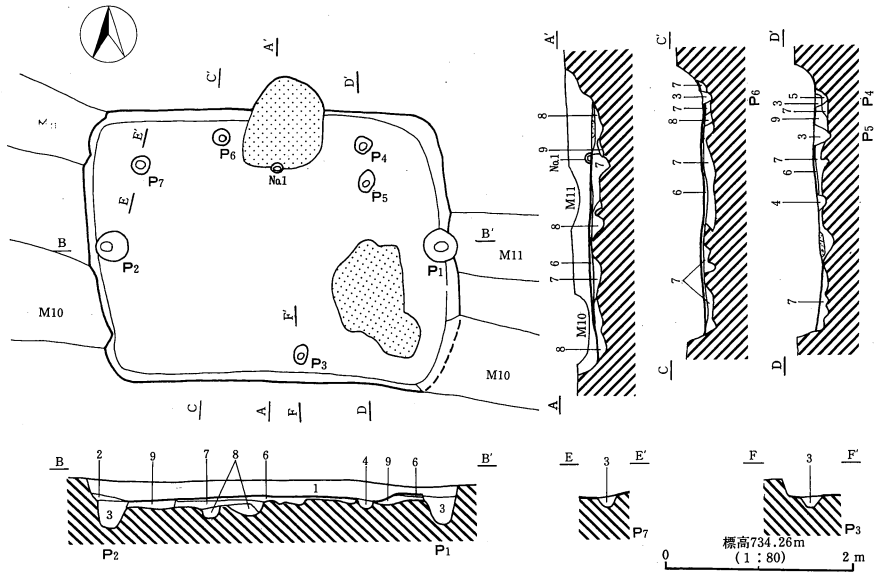
遺構 (第18・19図、写真16~19)

調査区西側Rくー6グリットにある。M10・11号溝状遺構が東西に切っており、ことにM10は壁と床面を壊している。全体層序第III層暗褐色土で検出された。

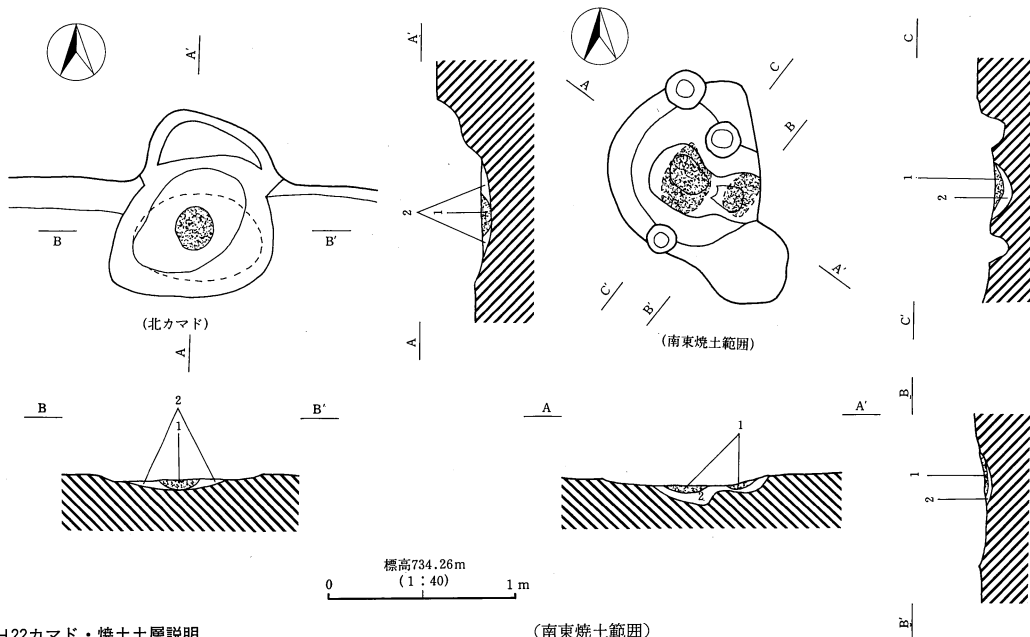
規模は3.6×2.7mで深さ18cmを測る。東西方向に長い長方形を呈する。主軸方位は北を指す。覆土は黒褐色土である。床面は強く叩きしめられ、黒褐色土とロームブロックの混ざった土を貼っている。支柱穴は東・西壁中央にあり、2本柱である。径34cm、深さ30cmを測る。

H22土層説明

- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色土 (7.5Y R 2/2)
1 cm大の小石含む。粘性なし。 | 6 黒褐色土 (10Y R 2/3)
ロームブロック、黒褐色土ブロック混。強くバリバリの床。 |
| 2 黒褐色土 (7.5Y R 2/2)
1 cm大のバミス含む。ローム粒子含み、1層より明るい。 | 7 暗褐色土 (10Y R 3/4)
バミス、ローム含む。 |
| 3 黒褐色土 (7.5Y R 2/2)
柱痕、しまりなし。 | 8 にぶい黄橙色 (10Y R 6/4)
ロームくすむ。 |
| 4 極暗褐色土 (7.5Y R 2/3)
5 mm大のバミス、焼土粒子含む。 | 9 黒褐色土 (10Y R 2/2)
バミス粒多く混。 |
| 5 暗褐色土 (10Y R 3/3)
ローム、バミス多く含む。 | |



第18図 H22号住居址実測図



H22カマド・焼土土層説明

(北 カマド)

- 1 赤褐色土 (5 YR 4 / 6)
焼土層。
- 2 黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2)
バミス粒含む。

(南東焼土範囲)

- 1 赤褐色土 (5 YR 4 / 6)
焼土層。
- 2 にぶい黄褐色 (10 YR 5 / 4)
ローム黒ずむ。

第19図 H22号住居址カマド・南東焼土範囲実測図



写真16 H22号住居址。M10・11の溝が東西方向に切っている。F21とも重なっている。床面は締まり、東西壁中央に支柱穴がある。(南より)



写真17 左(北壁)がカマド、右上に焼土範囲がある。(西より)



写真18 カマド火床部が残っているだけであった。(南より)

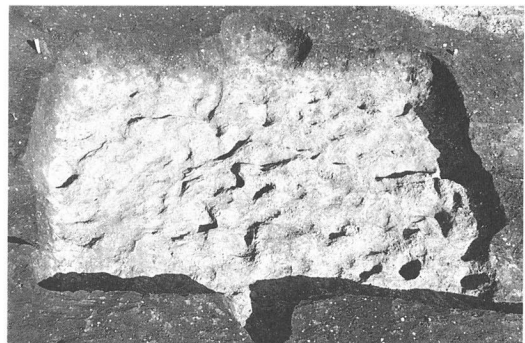
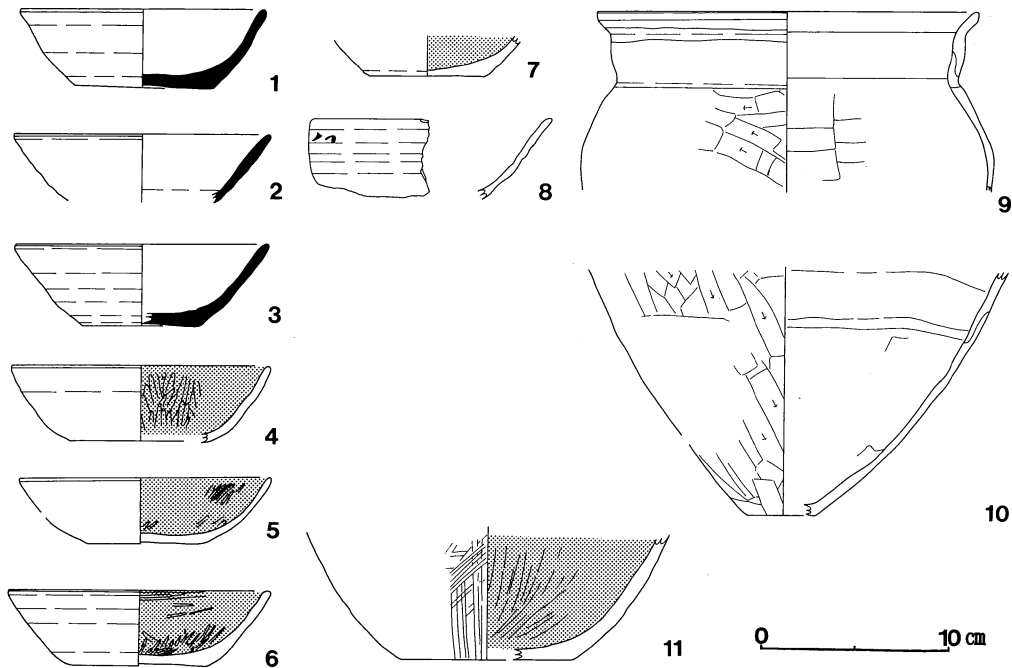


写真19 掘り方は中央をやや高く、周辺を10cm程窪めて黒褐色土を入れている。



第20図 H22号住居址出土遺物実測図

他に小ピットがカマドの周囲に4個、南壁下に1個ある。

カマドは北壁中央にあり、上部は除去されたらしく、火床部と煙道下面が残っていた。奥行き100cm幅44cmを測る。カマドの構築前の掘り込みはF21号掘立柱建物址と重なっていたため、つかみ切れなかった。また、南東の床面にも焼土範囲がある。長さ62cm幅44cmを測る。

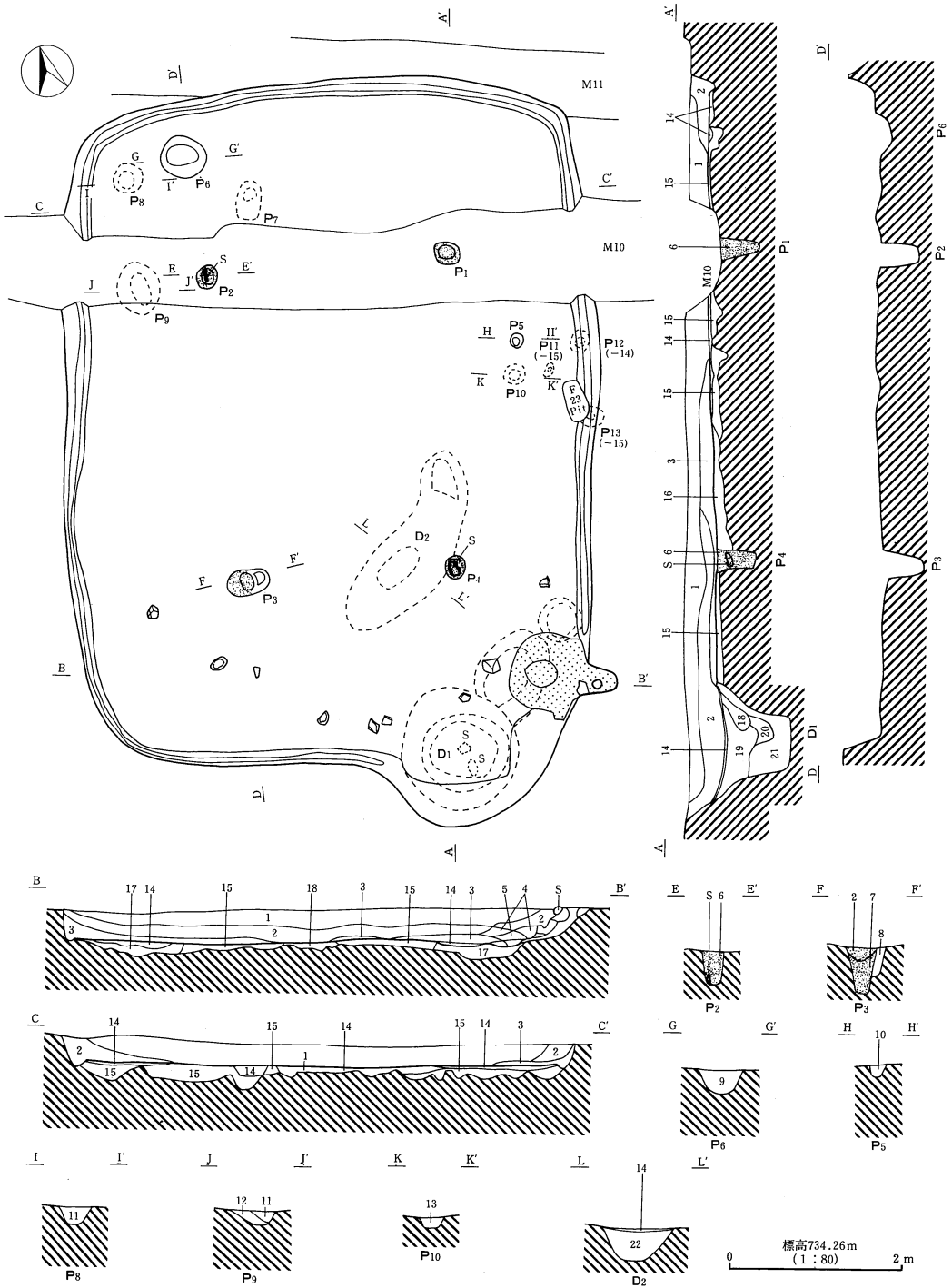
遺物（第20図、図版）

土器が同規模の住居址と比べて多く出土している。須恵器・土師器がある。

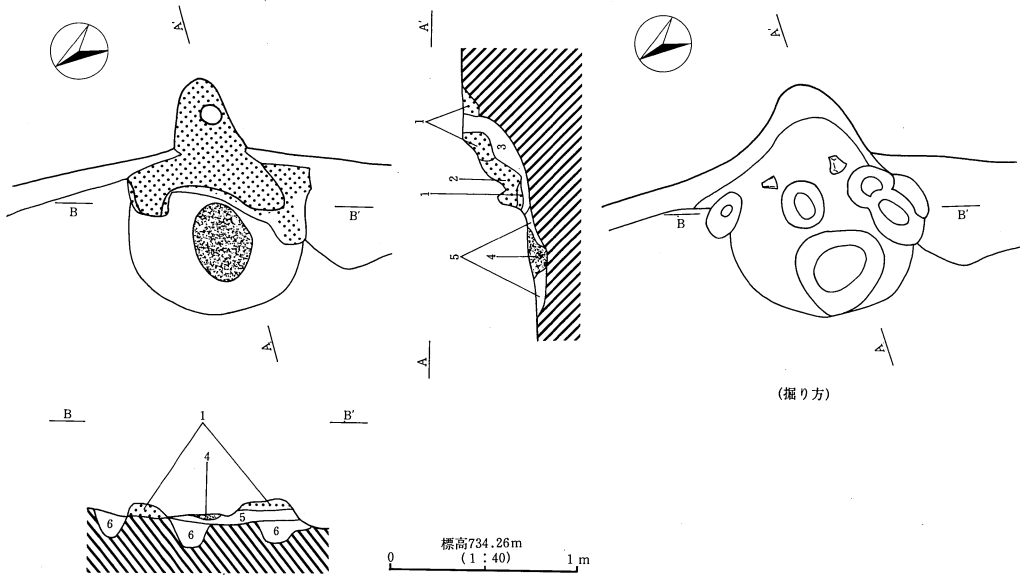
須恵器は壺・甕形土器の胴部片と杯形土器がある。杯は軟質で焼きがあまく、胎土の粗いものである。底部は回転糸切りのままである。土師器は杯・鉢・甕形土器がある。杯は内面ミガキ黒色処理されたもので、底部は回転糸切りである。8は土師器杯の口縁外面に墨書があるが読めない。11の鉢は外面と底部に簡略なミガキがなされる。甕は武蔵甕の薄手のものだが、その中では厚みのある方のもので、口縁部形は典型的な「コ」の字形である。

軟質の須恵器杯、内面ミガキ黒色処理の土師器杯、口縁部形「コ」の字形の武蔵甕という土器組成から、本住居址は9世紀後半に営まれたものであろう。

6) H23号住居址



第21图 H23号住居址实测图



H23カマド土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗赤褐色土 (5 YR 3 / 2)
粘土。</p> <p>2 暗赤褐色土 (5 YR 3 / 3)
粘土。</p> <p>3 黒褐色土 (5 YR 2 / 2)
焼土粒子含む。</p> | <p>4 褐色土 (7.5 YR 4 / 4)
焼土、灰を多量に含む。</p> <p>5 黒褐色土 (7.5 YR 2 / 2)
黒色土を含む。</p> <p>6 にぶい黄褐色 (10 YR 4 / 3)
ローム主体。</p> |
|--|---|

第22図 H23号住居址カマド実測図

H23土層説明

- | | |
|--|--|
| <p>1 黒色土 (10 YR 2 / 1)
小石含む。</p> <p>2 黒褐色土 (10 YR 2 / 2)
小石含む。</p> <p>3 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
ローム粉子、パミス多く含む。</p> <p>4 黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2)
焼土、粘土、粉子を含む。カマド崩壊層。</p> <p>5 黒褐色土 (7.5 YR 3 / 2)
焼土多く含む。カマド崩壊層。</p> <p>6 暗褐色土 (10 YR 3 / 3)
しまりなし。柱痕。</p> <p>7 暗褐色土 (10 YR 3 / 4)
しまりなし。ロームブロック混。柱痕。</p> <p>8 黄褐色土 (10 YR 5 / 6)
明黄褐色ロームに黒色土混じる。</p> <p>9 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
黒色土とロームブロック混。しまりあり。</p> <p>10 黒褐色土 (10 YR 3 / 2)
黄褐色ローム粒子、パミス含む。</p> <p>11 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
まれにパミス 5mm大含む。</p> | <p>12 暗褐色土 (10 YR 3 / 4)
ロームブロック、黒色土ブロック混。フカフカ。</p> <p>13 黄褐色土 (10 YR 5 / 6)
黄褐色ローム。</p> <p>14 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
炭化物、ローム粒子含む。床面。</p> <p>15 黄褐色土 (10 YR 5 / 6)
黄褐色ロームくすむ。床面。</p> <p>16 褐色土 (10 YR 4 / 4)
パミス少々含む。床面。</p> <p>17 黒褐色土 (10 YR 2 / 2)
ロームブロック、パミス含む。</p> <p>18 黒褐色土 (10 YR 3 / 2)
ローム多い。</p> <p>19 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
わずかに小石含む。</p> <p>20 黒褐色土 (10 YR 2 / 3)
黒色土ロームブロック混。</p> <p>21 暗褐色土 (10 YR 3 / 4)
ローム、黒色土大きいブロック混入。</p> <p>22 黄褐色土 (10 YR 5 / 6)
パミス多いローム層。黒色土含む。</p> |
|--|--|

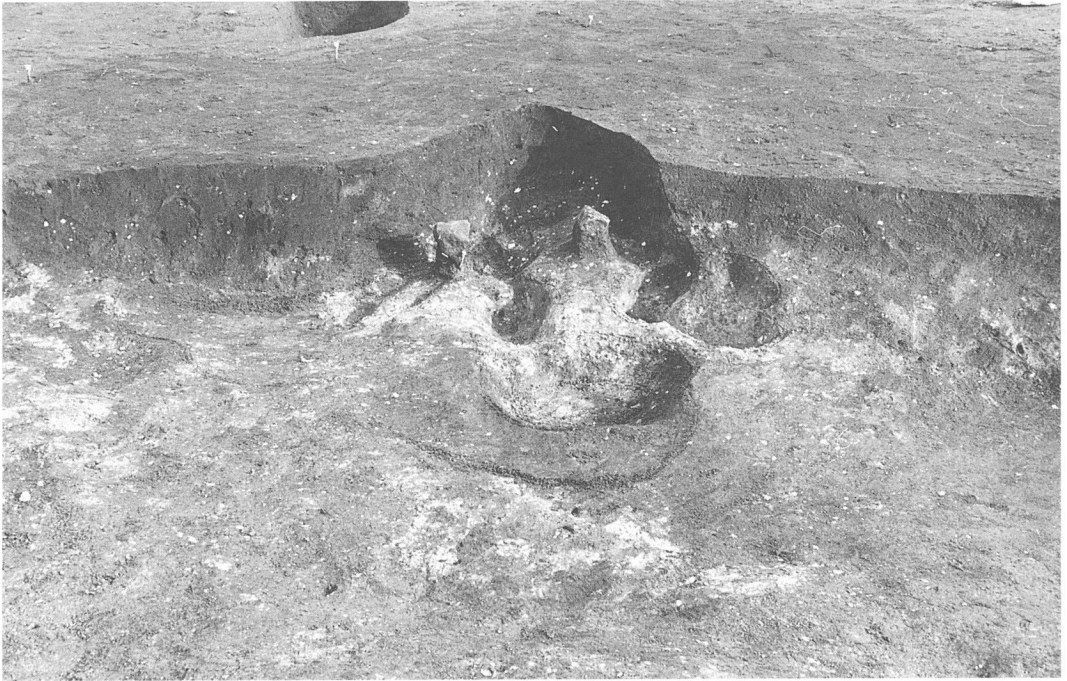


写真20 H23号住居址。カマドの掘り方。カマドは南東隅にあり、煙道が残っていた。煙道は壁より80cm突き出ている。カマドの前床面は貼り床され、締まっていた。(西より)

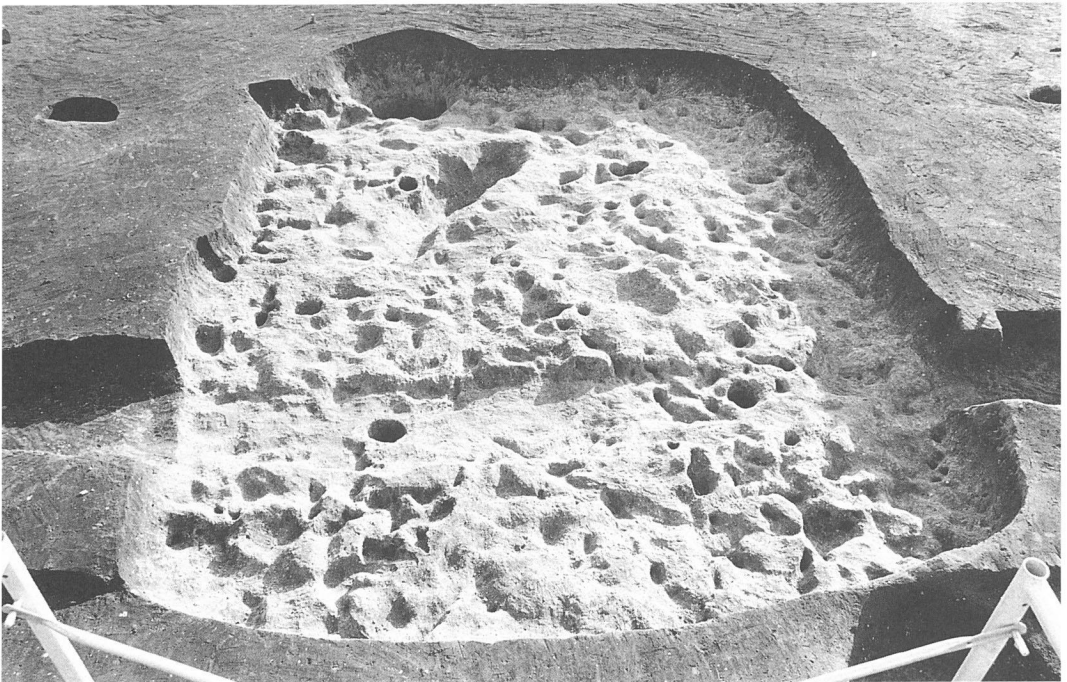


写真21 H23号住居址の掘り方。全体の生活面は軟弱で、つかみきれなかった。床は部分的に掘り込み貼り床するが大半はそのまま掘り込んだままの床である。(北より)

遺構（第21・22図、写真20・21）

調査区西の北に位置し、Rけー6グリットにある。M10・11号溝状遺構に切られM10に床面が壊される。F21号掘立柱建物址には切られる。全体層序第Ⅲ層暗褐色土で検出された。

規模は7.8×6.0mを測り、南東で南に張り出しを持つ隅丸長方形を呈す。深さは18cm。覆土は黒色土と黒褐色土で小石を含むやや砂質のものであった。

床面は軟弱で使用面での検出ができずに掘り方に至ってしまった。それでもカマドの前面だけは黒褐色土が貼り床され締まっていた。床は一部に貼り床がみられるが、15・16層は地山とも観察され、一部分を除いて床下に掘り込みを持たない床と思われる。王柱穴は掘り方まで下げてわかった。P1～P4の4本で、円形で径24～30cm深さ44～56cmを測る。P4内には押さえの石が入っていた。その他にP5からP12があるがいずれも浅い。

南東の南への張り出し部の床下から土坑（D1）が検出された。円形で径148cm深さ92cmを測るものである。中の土は人為的に埋められたようである。D2も床下から検出されたが、不定形で覆土も地山に近いことから風倒木痕と思われる。

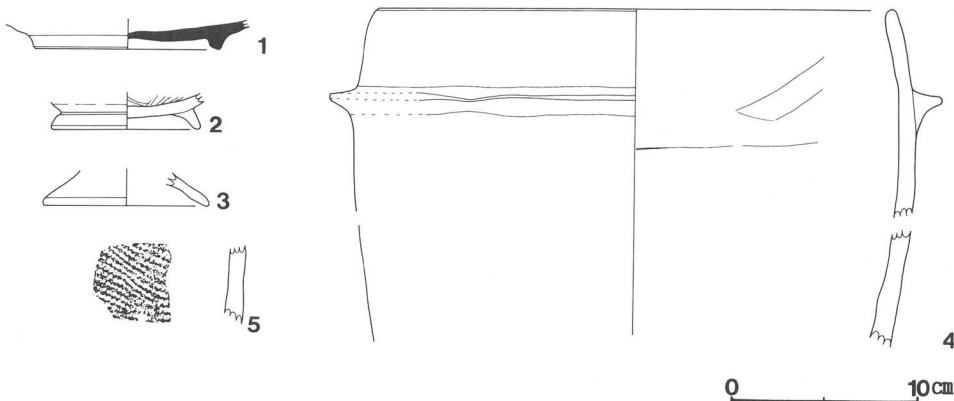
カマドは煙道部の残りがよく、径10cmの円形の煙道径が測れた。焚き口の方は崩壊して、床面に焼けた安山岩が散乱していた。暗赤褐色粘土と石を使用して構築している。奥行き110cm火床部の幅100cm、煙道の立ち上がり35°を測る。

遺物（第23図、図版）

本調査区最大の住居址なのに遺物は少ない。土器類のみで須恵器・灰釉陶器・土師器がある。

須恵器は甕型土器片と軟質の杯形土器片がある。図示した1は盤であろうか。土師器は内面ミガキ黒色処理された椀、台付き甕の脚部、羽釜がある。図示した厚手の羽釜は口径30cm弱の大釜である。他に外面にハケ目調整の羽釜もある。粉末質胎土の土師質の皿と椀の破片もある。

土器が少なく明確ではないが、南東カマドや羽釜の存在から10世紀後半代のものであろう。



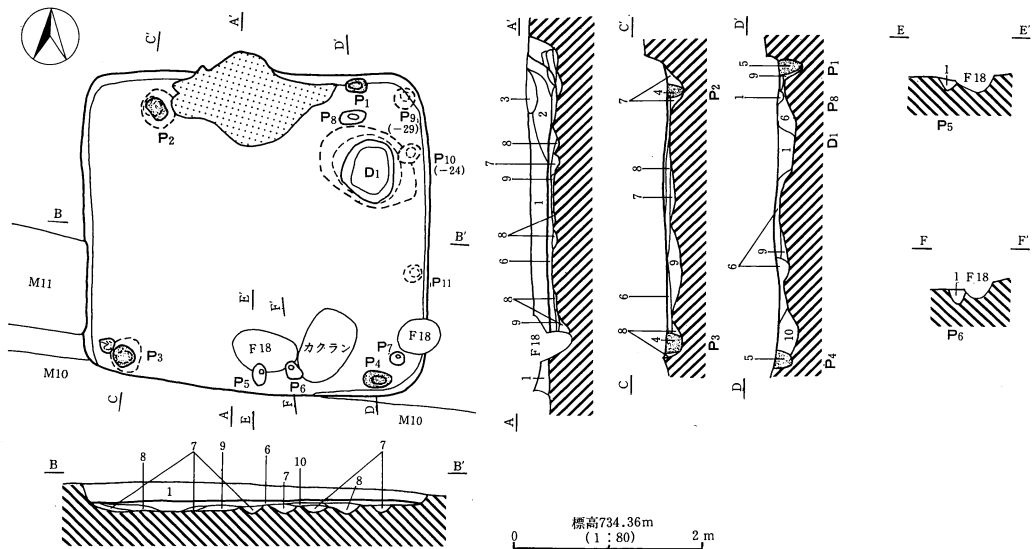
第23図 H23号住居址出土遺物実測図

7) H24号住居址

遺構 (第24・25図、写真22~27)

調査区西側中央にあたりRえー7グリットにある。M10・M11に切られ、M10により南壁を壊される。南東でF18号掘立柱建物址に切られる。

規模は3.5×3.2mを測り、壁残高は20cmである。東西にやや長いが方形を呈している。主軸方位はN-0°で北を指している。カマドは北壁中央にある。覆土は黒褐色土である。床面は貼り床され、非常に堅く叩き締められていた。黒褐色土とローム、所によっては粘土も入れ込んであった。掘り方は生活面より12cm程全体に掘り下げてあった。主柱穴は4本あり、北壁と南壁にある。P1は径24cm深さ20cm、P2は掘り方で径40cm深さ18cmと比較的浅いものである。その他のピットとしては南壁下中央に長径24cm短径14cm深さ16cmの楕円形の入り口ピットがある。掘り方では東壁下に径20cm深さ18cmの円形ピットが壁にそって検出された。土坑は北東の床面にあり、長径60cm短径56cm深さ18cmを測る。

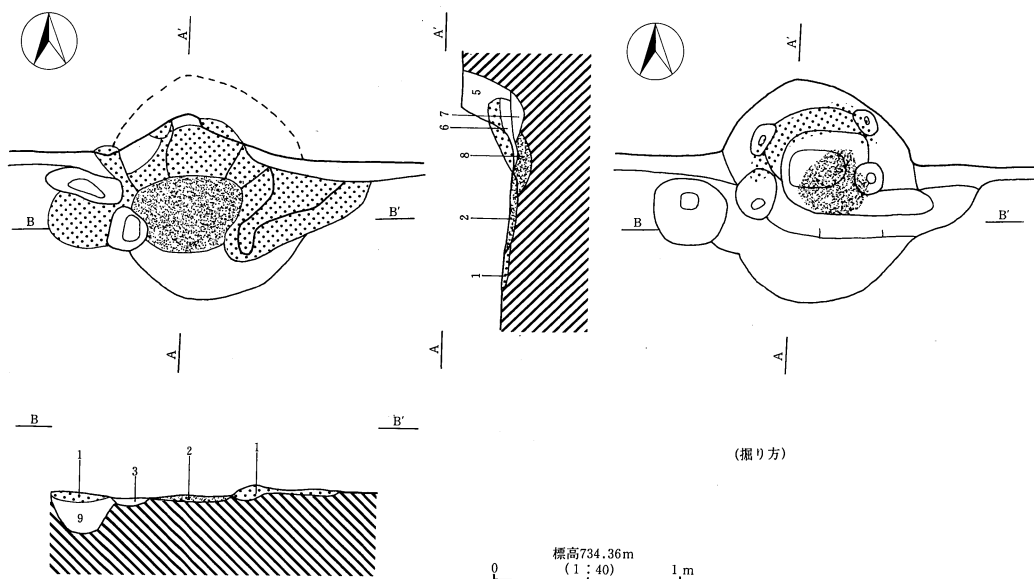


H24土層説明

- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色土 (10YR 2/2)
バミス 5mm~1cm大を含む。 | 6 黒褐色土 (10YR 2/3)
貼り床。黒褐色土を主体にロームと黒色土が入る。堅い床面。 |
| 2 黒褐色土 (10YR 2/3)
わずかにバミス・粘土を含む。 | 7 黄褐色土 (10YR 5/6)
黄褐色ロームくすむ。 |
| 3 にぶい褐色土 (7.5YR 5/4)
粘土。 | 8 黒褐色土 (10YR 2/2)
ロームブロック混入。 |
| 4 暗褐色土 (10YR 3/3)
しまりなし。ロームブロックを含む。柱痕。 | 9 明黄褐色 (10YR 6/8)
ローム層。 |
| 5 黒褐色土 (10YR 2/2)
しまりなし。柱痕。 | 10 明赤褐色土 (5YR 5/6)
ピンク粘土。 |

第24図 H24号住居址実測図

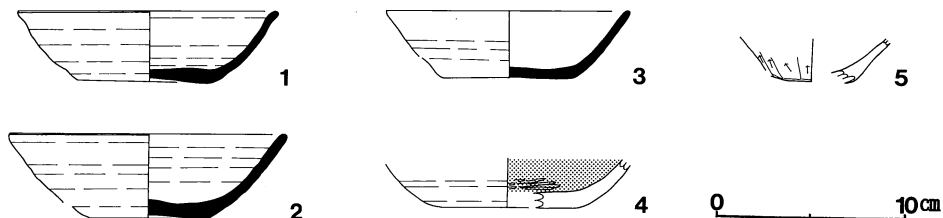
カマドは北壁中央にあり、二回構築されていた。使用していたカマドは煙道と袖基部が残り奥行き100cm、火床部幅90cmを測る。にぶい褐色粘土で構築している。このカマドの下から、旧カマドの別の火床部と煙道が見つかった。20cmほど北にずれ、焼土範囲と煙道の粘土が残っていた。



H24カマド土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 にぶい褐色土 (7.5YR 5/4) 粘土。</p> <p>2 褐色土 (7.5YR 4/4) 焼土。灰も含む。</p> <p>3 黒褐色土 (7.5YR 3/2)</p> <p>4 極暗赤褐色土 (5YR 2/3) 粘土粒子、焼土粒子を含む。</p> | <p>5 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粘土、焼土粒子を多く含む。</p> <p>6 暗赤褐色土 (5YR 3/3) 粘土、焼土、炭化物粒子多量を含む。</p> <p>7 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 焼けている。</p> <p>8 明赤褐色土 (5YR 5/8) ロームが焼けている。</p> <p>9 極暗褐色土 (7.5YR 2/3)</p> |
|---|--|

第25図 H24号住居址カマド実測図



第26図 H24号住居址出土遺物実測図



写真22 H24号住居址。生活面を出した状態。カマドは上の中央(北壁)。手前(南東)はF18に切られている。床面は貼り床され非常に堅く叩き締められている。(南より)



写真23 H24号住居址掘り方。全体に掘り下げて土を入れ込んでいる。支柱穴が南北の壁際に4本ある。(南より)

遺物（第26図、図版）

遺物の量は少ない。須恵器・土師器がある。

須恵器は杯形土器のみでいずれも粗い胎土を含む軟質のものである。調整はロクロ横ナデ、底部は回転糸切りされる。土師器は杯・鉢・甕形土器がある。図示した杯形土器は内面ミガキ黒色処理された26図4と武蔵甕の底部26図5のみである。図示できないがカマドからは口縁部形「コ」の字形の武蔵甕の口縁部が出土している。武蔵甕の中では7mmと厚手の胴部片もカマドから出土している。鉢形土器は内面ミガキ黒色処理され、底部は回転糸切りのものである。

これらより9世紀後半の住居址であろう。

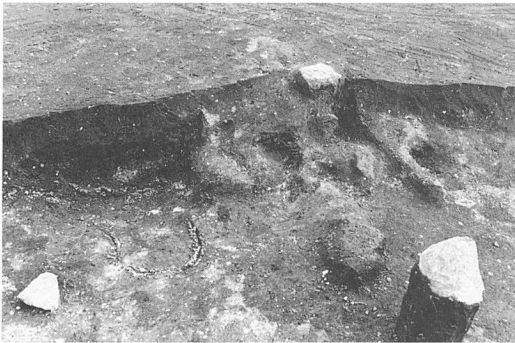


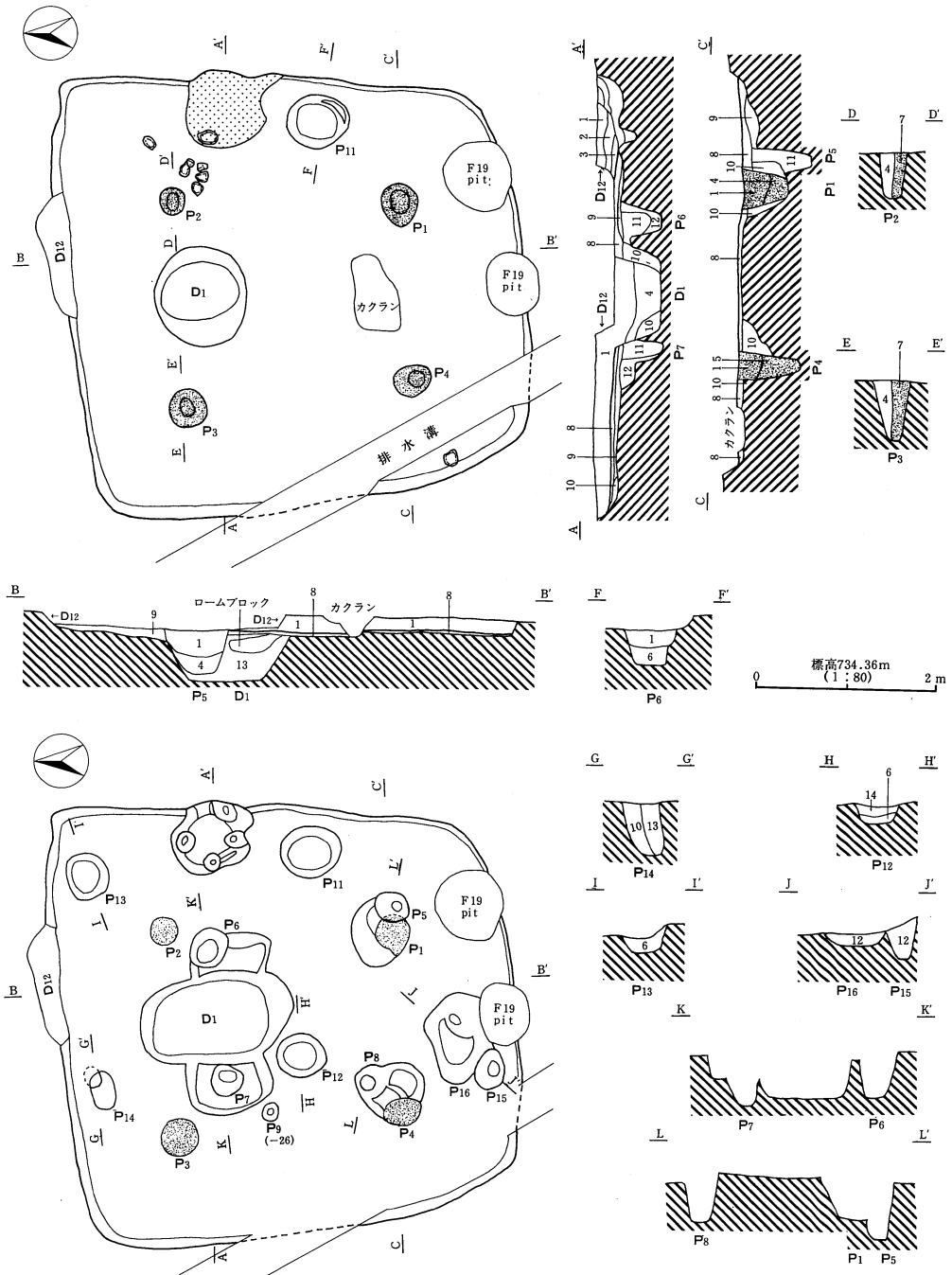
写真24・25 H24号住居址のカマドが残っていた状態。右は使用カマドの火床部を出した状態。
（南と東より）



写真26・27 使用カマドの掘り方を出したところ、旧カマドの火床部と粘土がでてきた。
写真27は旧カマドの掘り方を出した。（東より）

8) H25号住居址

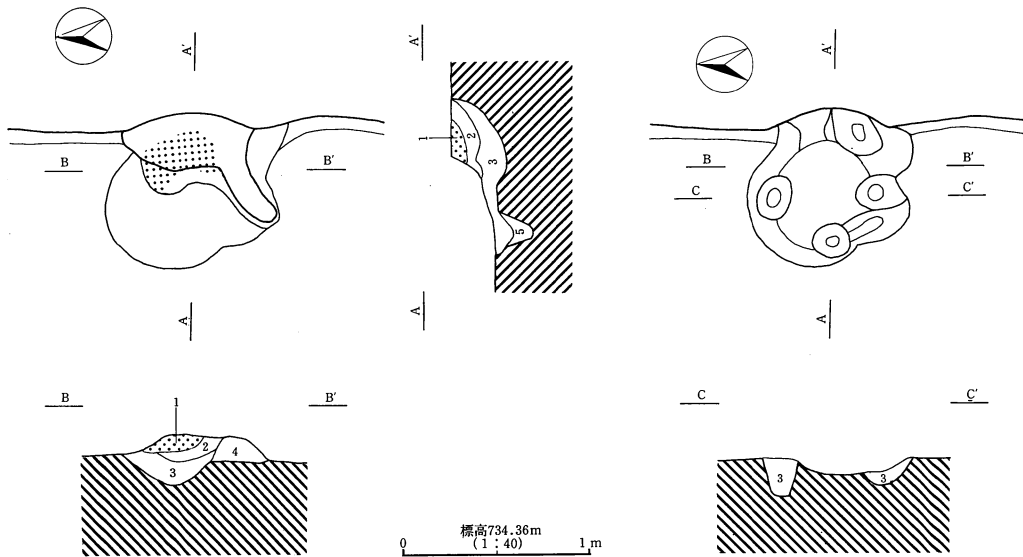
遺構 (第27・28図、写真28~30)



第27図 H25号住居址実測図

H25号住居址は調査区我真中、Rえー5グリットに位置する。5遺構と重複関係を持っている。F19・F34号掘立柱建物址とD12号土坑に切れ、H26号住居址とF20号掘立柱建物址を切っている。また西は排水溝に攪乱される。ことにD12号土坑は床面まで影響し、プランも重なることからH25号住居址の調査にあたってわからないところが多かった。検出面は全体層序第III層褐色土である。覆土は小石を含む黒褐色土である。

規模は4.8×4.7m壁残高20cmを測る。形態は不正方形である。カマドを軸とする主軸方位はN-82°-Eを指す。カマドは東壁にあり、中央よりやや北寄りにある。床面はD12号土坑の底面



第28図 H25号住居址カマド実測図

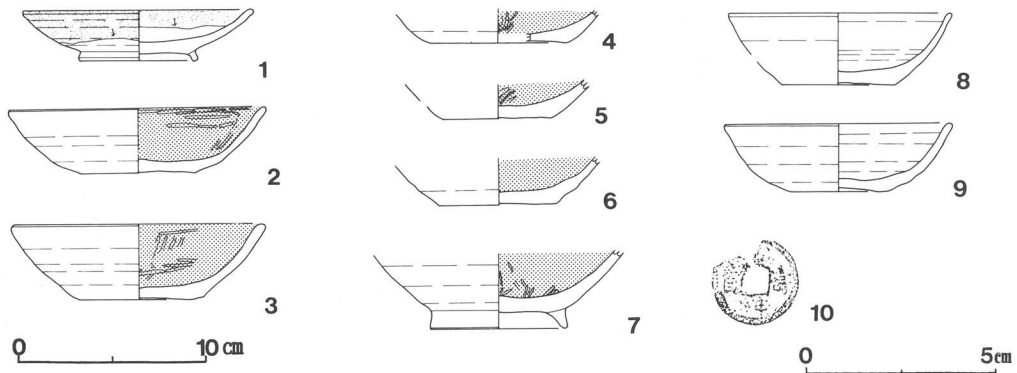
H25土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 黒褐色土 (10YR 2/3)
1~2 cm大の小石含む。</p> <p>2 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
焼土粒子わずかに含む。カマド崩壊層。</p> <p>3 黒褐色土 (10YR 2/2)
しまりなし。</p> <p>4 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム粒子、バミス多く含む。</p> <p>5 褐色土 (10YR 4/4)
黒色土含む。しまりなし。柱痕。</p> <p>6 褐色土 (10YR 4/6)
黄褐色ロームがくすむ。しまりがない。</p> <p>7 暗褐色土 (10YR 3/4)
まるでしまりなし。柱痕。</p> | <p>8 暗褐色土 (10YR 3/3)
床面。まれにロームブロックを含みバミス粒を多く含む土で堅められている。南側はことに堅い。</p> <p>9 黒褐色土 (10YR 3/2)
しまりなし。</p> <p>10 褐色土 (10YR 4/4)
ローム主体に黒色土含む。</p> <p>11 暗褐色土 (10YR 3/4)
しまりまるでなし。柱痕。褐灰色粘土ブロック含むものあり(P2)</p> <p>12 暗褐色土 (10YR 3/3)
バミスを多く含む。</p> <p>13 黒褐色土 (10YR 2/3)
褐灰色粘土ブロック含む。柱痕。</p> <p>14 黒褐色土 (10YR 2/3)</p> |
|--|---|

H25カマド土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
粘土粒子含む。焼土粒子も含む。</p> <p>2 褐色土 (7.5YR 4/4)
焼土粒子を多く含む。</p> <p>3 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
焼土・炭化物粒子含む。</p> | <p>4 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
しまりバミス粒子含む。</p> <p>5 褐色土 (10YR 4/6)
ロームが黒ずむ。しまりなし。</p> |
|---|--|

と同じレベルであるために明確ではないが、ロームブロックを含む暗褐色土を入れて叩き締めている。南側はことに堅い。生活面では4本の支柱穴と土坑が検出された。支柱穴は径30~40cm深さ47~79cmを測る。土坑は北床面中央にあり、生活面では径112cm深さ52cmの円形土坑(D1)である。カマドの南P11はやや南北に長い楕円形のものである。長径66cm深さ41cmのピットの中に20cm程黒褐色土が入り、下層はロームが入っていた。床下は8~16cm程下がり、多くの柱穴が検出された。P5~P8が支柱穴に沿ってあり、径34~38cm深さ50~67cmを測る。P11は生活面で検出されたが、D12号土坑との重複で床面が下がっており、床下のピットであるかもしれない。掘り方で検出されたP12・P13は覆土の構成がP11と似ており、同様のピットであろう。D1は掘り方では1.7×1mの隅丸長方形に広がり、長径90cmのテラスが東西についた。遺構の重複関係が読み切れず、他の遺構が存在するのか複雑なピットの配列である。



第29図 H25号住居址出土遺物実測図



写真28

カマドの掘り方。カマドは、右側(南側)袖と火床部が残っていたが、明確な焼土範囲はみられなかった。カマドの位置は西壁、規模も小さいカマドである。

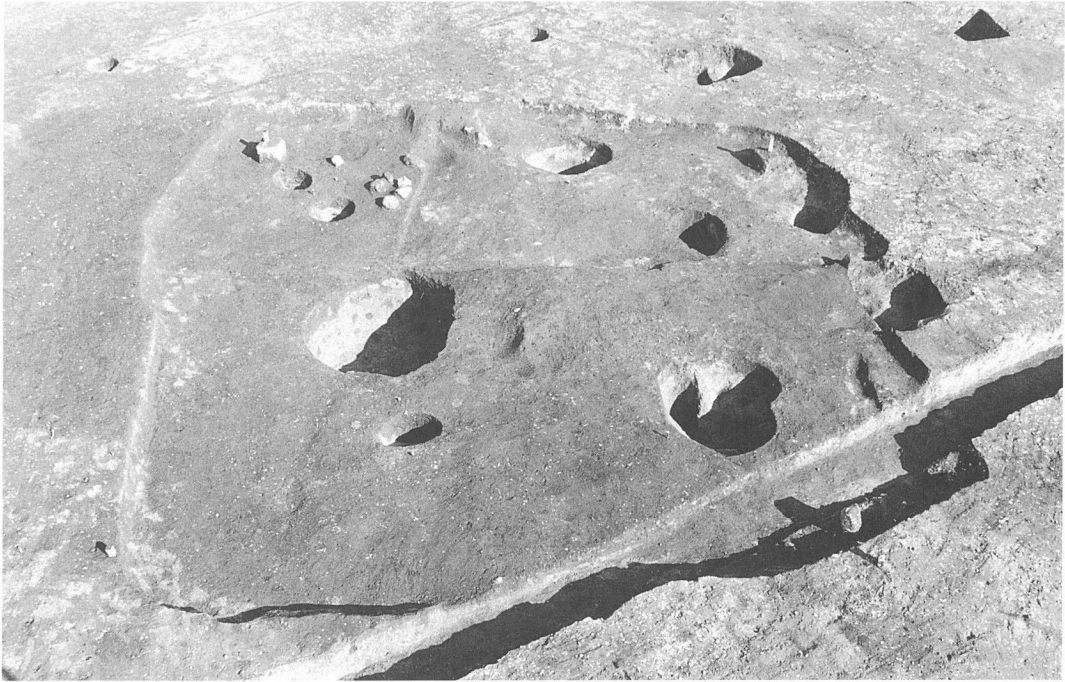


写真29 H25号住居址。生活面を出した状態。上の左寄り（東壁の北寄り）にカマドがある。重複関係が多く壊されているところが多い。床面は叩き締まり堅い。（西より）

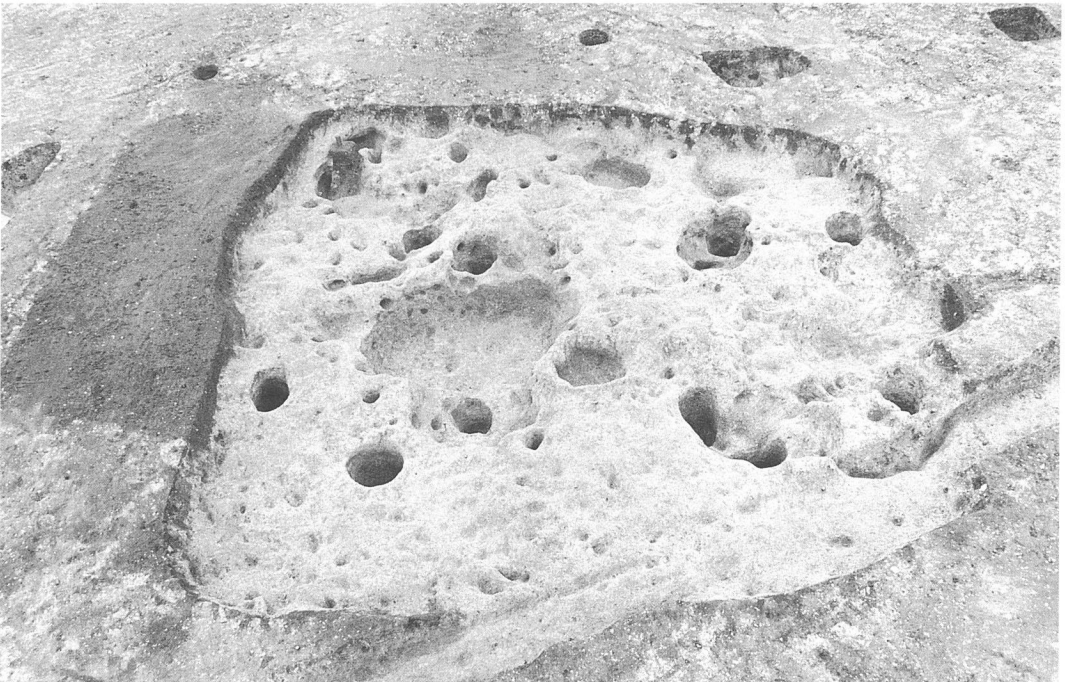


写真30 床を剥いで掘り方を出す。柱穴が多く出てきて複雑な遺構となる。土坑も広がる。左上の黒い所はH26号住居址である。（西より）

カマドの残りはよくなく、天井部は崩壊していた。暗褐色粘土を使用して構築しており、覆土と同色なためカマドとの土の判断が難しかった。南袖と煙道部が残り奥行き82cm幅90を測る。はっきりとした焼土範囲は認められなかった。

遺物（第29図、図版）

遺物の少ないこの遺跡の中では図示した他に3kg破片があり、多い方である。「富壽神寶」が出土している。初鑄年弘仁9年(818)のものである。出土状況はD12号土坑の底面からであるが、その底面が重複関係の中でつかみ切れなかったため本住居にも該当するものである。土器類では灰釉陶器・須恵器・土師器がある。

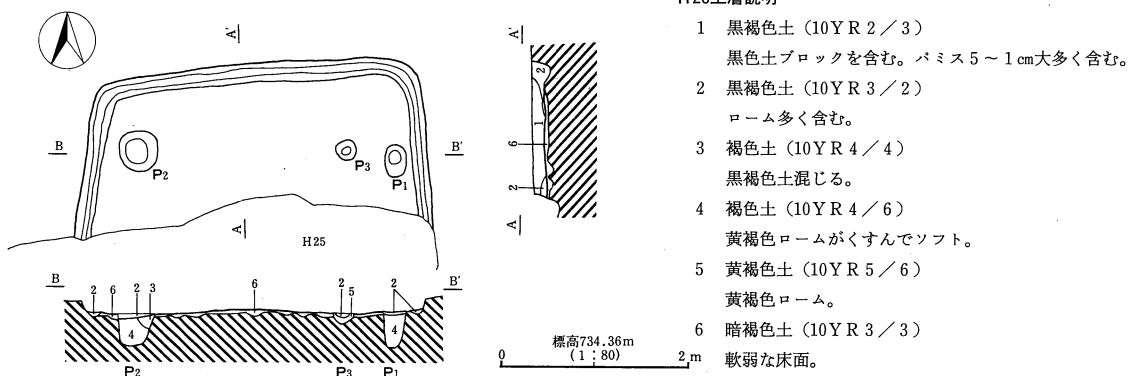
灰釉陶器は、壺胴部片と皿があり、図示した皿は柱状に近い高台の付くものである。須恵器は甕・壺・杯・蓋形土器がある。いずれも破片で図示できるものではない。土師器は甕と杯形土器があり甕形土器は図示できないものの破片の量はあり、口縁部形「コ」の字を呈した武蔵甕とロクロ調整のやや厚手の甕とがある。小甕はかき目調整のものがある。杯は内面ミガキ黒色処理される杯の中で8・9の杯はロクロナデ調整されるのみのものである。高台の付く内面ミガキ黒色処理された皿も出ている。

武蔵甕や軟質の須恵器杯、内面ミガキ黒色処理の杯などからは9世紀後半の様相がうかがえるが、ロクロ甕が混在し、ロクロナデ調整のみの杯の存在からは、10世紀代にまたがる住居址であろう。

9) H26号住居址

遺構（第30図、写真31・32）

H25号住居址に南側を切られ、北半域のみ検出できた。Rえー4グリットにあり、東西3.6m南北の残りは1.6mを測る。壁残高12cmである。主軸方位はN-5°-Wでカマドは検出されていない。



第30図 H26号住居址実測図

覆土は黒褐色土で、床面は暗褐色土がいくらか叩き締められていたが軟弱な床面である。掘り方は5～8cm下がるがほぼ平らである。柱穴はP1は34×26cm深さ32cm、P2は44×40cm深さ37cmで主柱穴である。P3は8cmと浅いものである。H25号住居址に本住居址のピットと判明するものはなく、南側の範囲はわからなかった。

遺物

図示できる個体はなかった。破片も総量220gと少ない。須恵器と土師器がある。

須恵器は甕・杯（軟質）・壺形土器の破片がある。土師器では甕・杯形土器がある。甕は武蔵甕で、器肉の薄いものである。杯は内面ミガキ黒色処理されるものである。

これだけの資料で断定はできないが、H25号住居址の9世紀後半の土器とあまり変わらないものであることから9世紀後半に位置づけられよう。



写真31 H26号住居址。手前の黒いところが床面。上はH25号住居址。H25号住居址に切られて南半分はない。（北より）



写真32 H26号住居址掘り方。右側の滑らかなところがH26号住居址。（東より）

10) H27号住居址・F30号掘立柱建物址

遺構（第31・32図、写真33～37）

調査区中央南端にあり、Rいー5グリットにある。東の壁と床面をM8の用水に切られている。5.3×5.0m（東西）を測り、やや南北に長い方形を呈す。壁残高は32cmである。東西の規模は推定である。主軸方位はN-0°でカマドは北壁ほぼ中央にある。

覆土は小石を含む黒褐色土で、床面は黄褐色ロームと黒色土を混入させた土を叩き締めて非常に堅緻である。この生活面で検出されたピットは、主柱穴4本、副柱穴1本と出入口のピットである。床面が堅かったので、柱根が良く解った。P1～P4の柱根の径は30cm深さ40cm前後を測る。掘り方はさらに20cmほど深くなる。P5はP4の副柱穴であろうか径18cm深さ20cmの小ピットである。P6は出入口施設にかかわる長楕円形のピットで、長径60cm深さ22cmを測る。

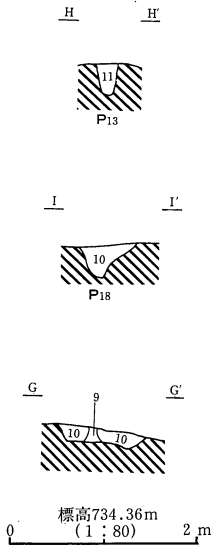
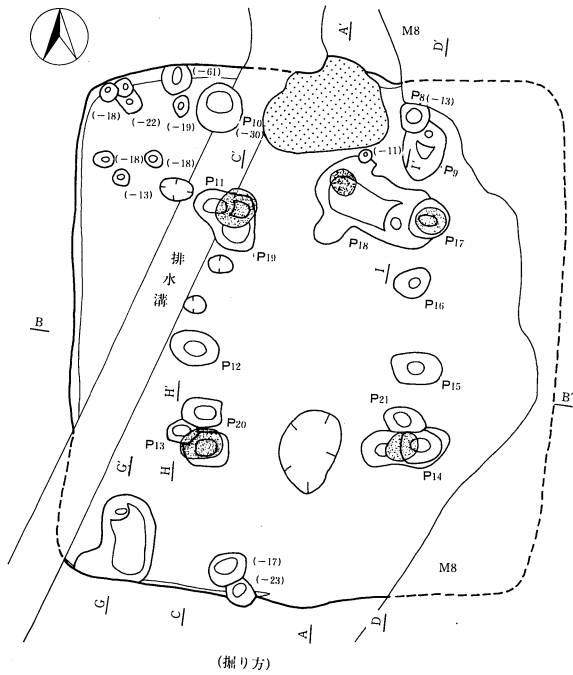
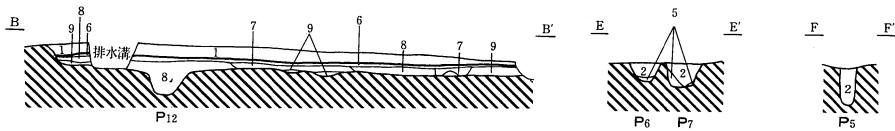
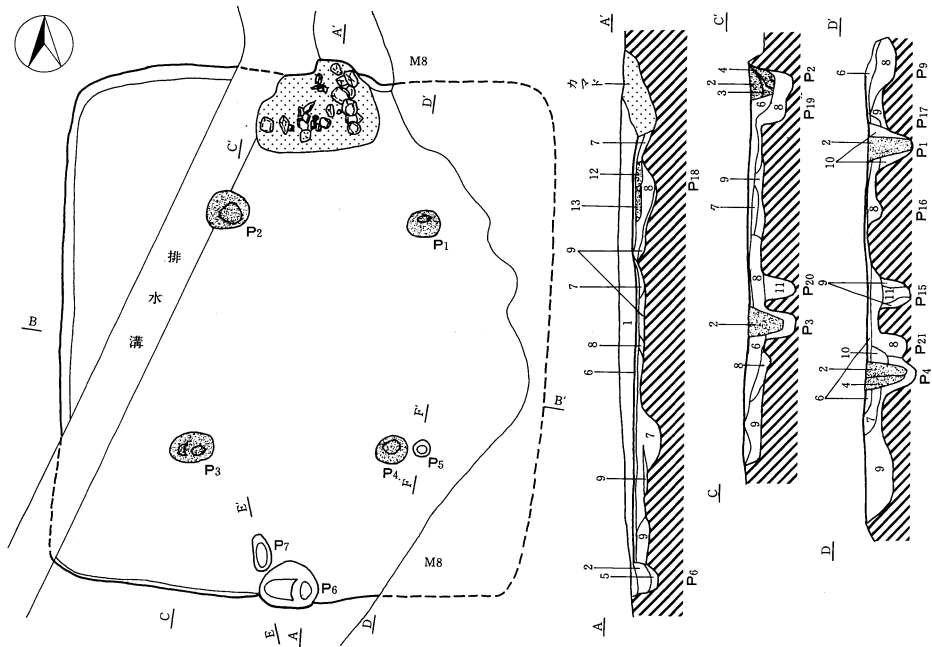
床下は8～16cmほど下がり、主柱穴に囲まれる範囲が高く、周辺部が10cmほど低くなる。また、床下からは多くのピットが検出された。P8～21の柱穴のピットと他にも性格のはっきりしないピットが北西隅に多数あいている。また旧カマドの痕であろう焼土範囲も現在のカマドより南に寄った床下にあった。この旧カマドに伴う柱穴がP18～P21であり、楕円ないしは隅丸長方形を呈し長径40cm深さ27～40cmを測る。

P9～P17は梁行き3.6m×桁行き2.3mの掘立柱建物址である。3×1間の建物であるが、浅い柱穴は住居址によって壊されている。N-5°-Eの南北棟。暗褐色土の柱根を持つ。柱穴の規模は長径34～50cm深さ30cm前後である。（F30号掘立柱建物址）

カマドは西端を排水溝に壊されるが、残りはよかった。奥行き110cm幅130cmを測り、最大径で20cm大の軽石を多く芯材に組み、暗褐色粘土を充填している。焼土・灰が多量に残り、火床面も良く焼けていた。カマドの掘り方は構築方法が良く理解できる資料である。貼り床後、カマドの大きさや形を作る要所に、穴を掘ってから石を置いて作っている。カマドからは土器と鉄滓が出土している。

H27土層説明

- | | |
|---|--|
| 1 黒褐色土 (10YR 3/2)
小礫含む。 | 8 明黄褐色土 (10YR 7/6)
明黄褐色土のロームブロックに黒褐色土等が混じる。 |
| 2 黒褐色土 (10YR 2/3)
小礫少々含む。しまりなし。柱痕。 | 9 黄褐色土 (10YR 7/8)
ロームに黒色土含む。 |
| 3 暗褐色土 (10YR 3/4)
ローム粒子多い。 | 10 明褐色土 (10YR 3/3)
しまりなし。パミス粒多くロームブロック混。 |
| 4 褐色土 (10YR 4/4)
ロームブロックと黒色土ブロック混入層。 | 11 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム粒子、黒色ブロック含む。しまりなし。柱痕。 |
| 5 明黄褐色土 (10YR 7/6)
明黄褐色ローム。 | 12 明褐色土 (7.5YR 5/8)
焼土。 |
| 6 黒褐色土 (10YR 2/3)
ロームブロック、パミス、黒色土を混入する非常に堅緻な床。 | 13 にぶい赤褐色土 (5YR 5/4)
焼けている。 |
| 7 黒褐色土 (10YR 2/2)
ロームブロック、パミスが6層より少ない。 | |



標高734.36m
(1:80) 2m

第31図 H27号住居址実測図

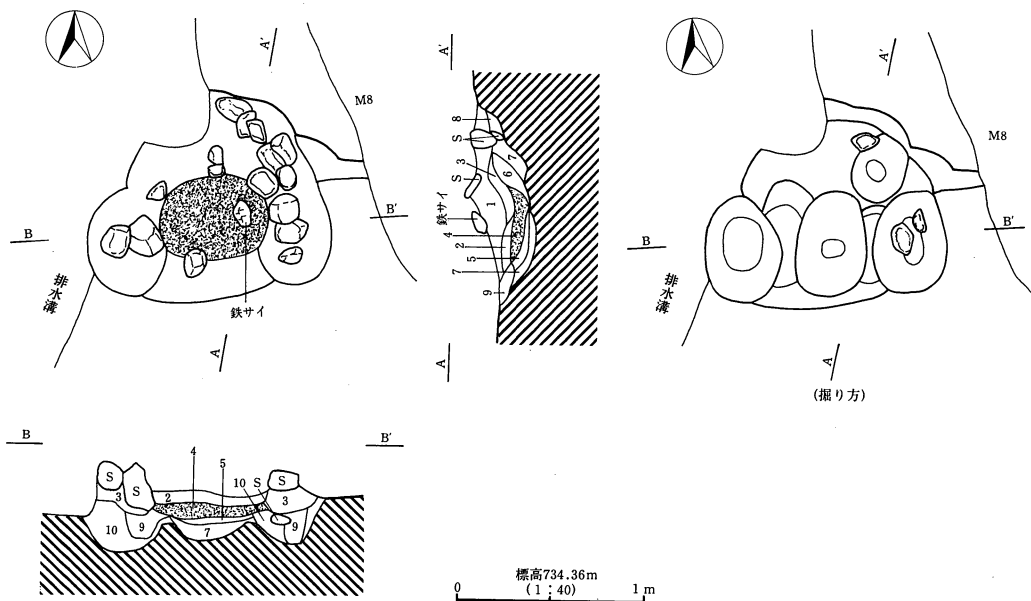
遺物（第33図、図版）

割合多くの土器片が出土し、図示した他に2.6Kgの破片がある。須恵器と土師器がある。また鉄製の角柱の細いものと鉄滓がある。

須恵器は短頸壺・長頸壺・甕形土器片等9片と杯形土器が多くある。図示できたのは杯形土器のみでいずれも軟質のものである。底部は回転糸切りのままである。土師器は甕と鉢・杯形土器があり、甕形土器はいずれも武蔵甕である。鉢は内面ミガキ黒色処理され、底部は回転ヘラケズリ調整されている。杯は内面ミガキ黒色処理される。

鉄製品は柱状で長さ14cm、一辺6mmの方形の断面を持つ。片方でやや平たくなり、曲がっている。鉄滓は550gである。

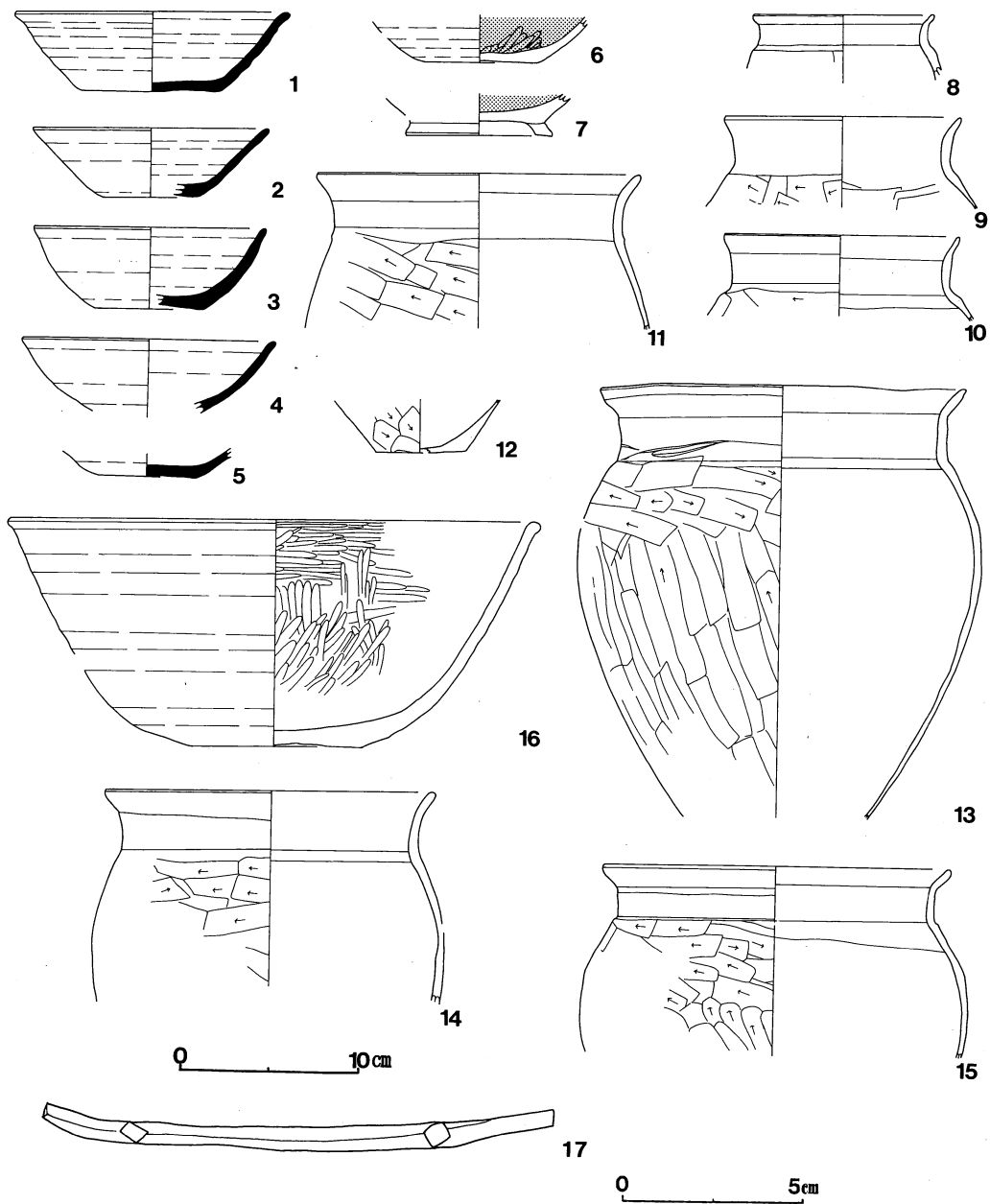
土器組成において須恵器杯と武蔵甕が主体をなしていることから、9世紀代後半に営まれた住居址とみられる。



H27カマド土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
焼土含む。</p> <p>2 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
粘性あり。</p> <p>3 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
粘土層。焼土含む。</p> <p>4 褐色土 (7.5YR 4/4)
焼土、灰を含む。</p> <p>5 にぶい褐色土 (7.5YR 5/4)
にぶい黄褐色ローム、焼けている。</p> | <p>6 褐色土 (7.5YR 4/4)
焼けた土。ロームが焼ける。</p> <p>7 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
褐灰色土含む。</p> <p>8 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
ローム、パミス5mm大含む。</p> <p>9 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
焼土、黒味を帯る (焼土粒子5mm大を多く含む灰含む。)</p> <p>10 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
焼土粒子2~5mm大を含む。土器も含みや粘性のある層。</p> |
|--|---|

第32図 H27号住居址カマド実測図



第33图 H27号住居址出土遺物実測図



写真33 H27号住居址。用水に手前は壊されている。床面は堅く締まっていたので、柱穴が良くわかった。
(東より)



写真34 床面を下げて掘り方を出す。柱穴が重なって検出され、床下には旧住居址と掘立柱建物址(F31号掘立柱建物址)があった。(東より)



写真35 H27号住居址カマド。カマド内からは多くの土器と鉄滓が出土している。(南より)



写真36 両袖と火床部を出したところ。袖には軽石を積んでいる。(南より)



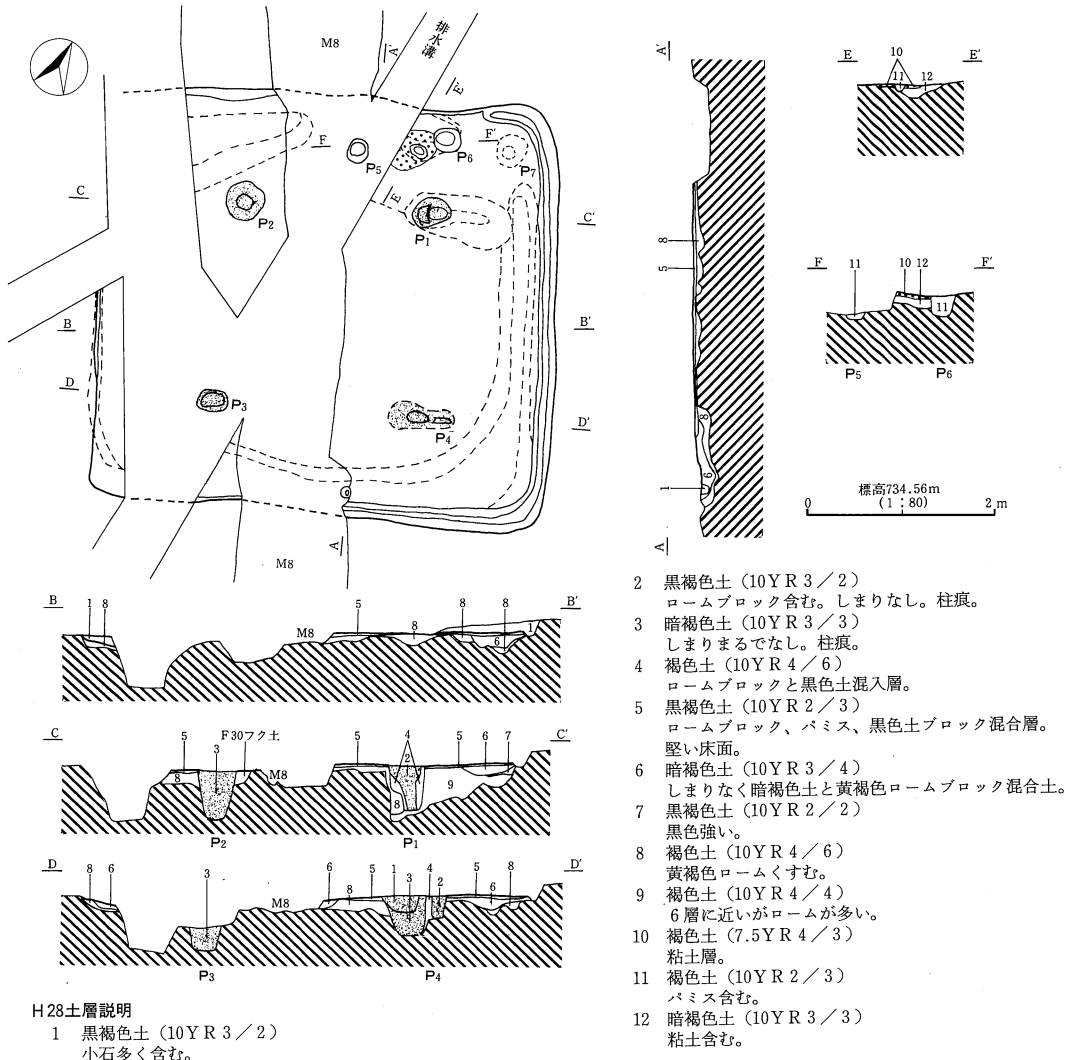
写真37 カマドの掘り方。最初から袖の位置にあたる場所を下げ、その上に石を積んでいる。(西より)

11) H28号住居址

遺構 (第34・35図、写真38・39)

調査区中央南側、Rあー4グリットにある。住居址を排水溝とM8の用水が切っているため、床面とカマドは大半が破壊されている。西側は筆境で一段低く削平されているため、床面は残っていない。F25号掘立柱建物址を切っている。

規模は4.3×4.7mを測り、東西にやや長いが方形を呈する住居址である。壁残高は12cmを測る。主軸方位はN-27°-Wで少し西に向いている。カマドは北壁中央にあったらしく、溝に壊されて右袖の残りと思われる粘土範囲がある。覆土は黒褐色土で、小石を含む。



第34図 H28号住居址実測図



写真38 H28号住居址。手前(東側)は残ったが、西側は溝に壊されている。カマドもちょうど溝と重なったため壊されてしまった。4本の支柱穴は明確にわかった。(東より)

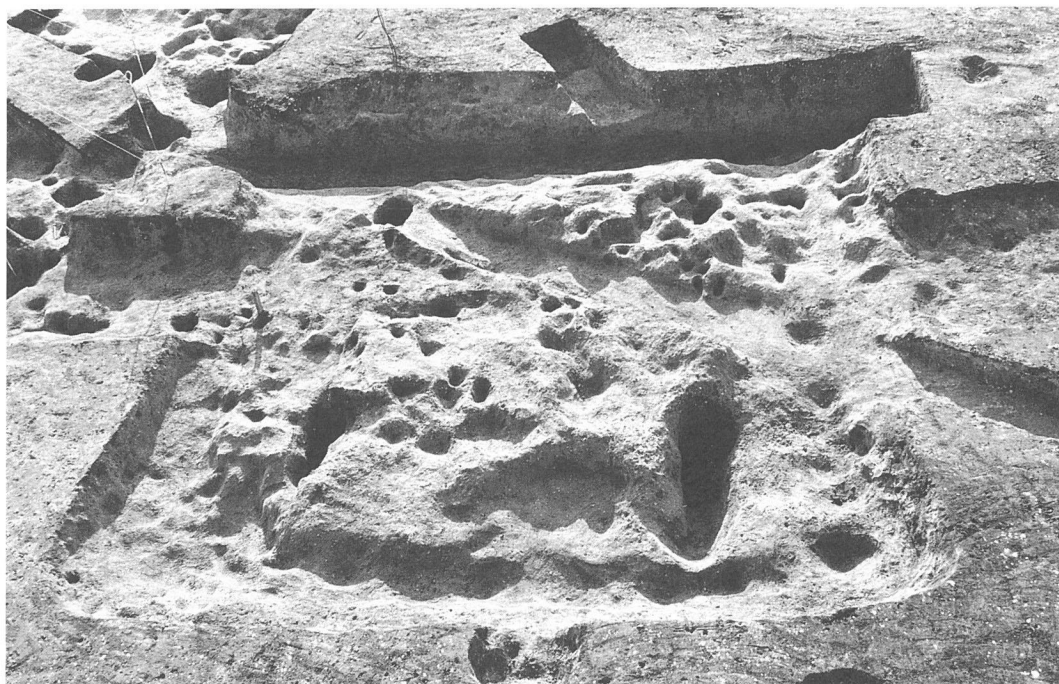
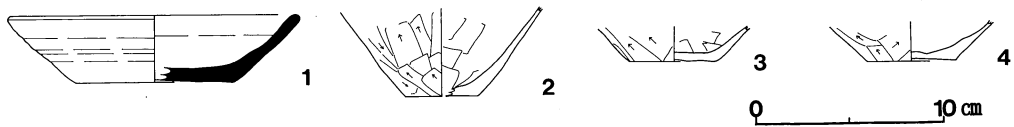


写真39 H29号住居址。床面を下げると中央が高く、周辺を深く掘り込んであった。P1とP2は長楕円形の掘り込みとなった。(東より)



第35図 H28号住居址出土遺物実測図

床面はロームブロックと黒色土を入れて叩き締めた堅い床である。床下の掘り込みは4本の主柱穴の中は高く、周辺部を20cmほど下げている。柱穴は柱痕が観察された。P1が110×52cm深さ52cmの長楕円の掘り方の中に径40cm程の柱根が残っていた。P2は44×40cm深さ54cm円形、P3は溝の上部を壊されたがわかり、掘り方と柱根が一致している。P4・P5は掘り方では長径64cmの楕円形のピットの中にあり、P4は46×30cm深さ48cm、P5は20×14cm深さ25cmを測る。

遺物（第35図）

土器類だけであるが、量は少ない。須恵器と土師器がある。

須恵器は短頸壺肩部、軟質の杯がある。土師器は甕の破片のみで、図示したものと同様武蔵甕である。

これらからこの住居址の年代を推定するのは困難であるが9世紀後半以降の住居址であることはまちがいない。

12) H29号住居址

遺構（第36図、写真40）

調査区中央Rあ-1グリットにある。畑境の段差があり、掘り込みの浅い住居址であるため削平されて規模はわからない。カマドと思われる火床部と柱穴が見つかった。堅穴住居址としたがプランも明確でなく掘り方もつかめないことから掘立柱建物址である可能性もある。

床面・掘り方ともに削平されて不明。P1～P3が主柱穴でP4は排水溝に壊されたものと思う。径50～60cm深さは検出面が斜めで比較できないので水糸からは50～60cm前後を測る。

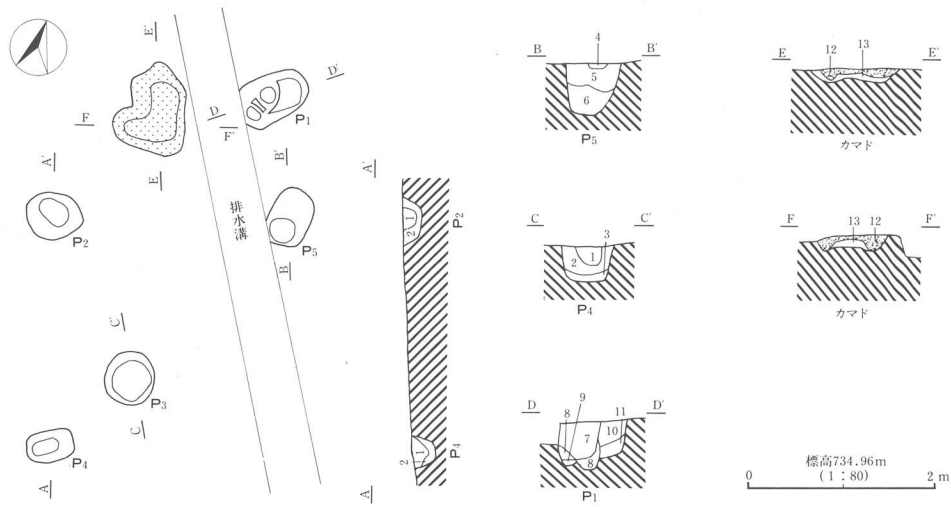
カマドと思われる焼土範囲は、奥行き100cm幅80cmの範囲にあり、わずかであるが袖の粘土が残る。

遺物

土器の破片が全部で20点のみである。図示できるものはなく、弥生時代の赤色塗彩の壺片、須恵器・土師器がある。

須恵器は軟質の杯と蓋形土器である。土師器は武蔵甕片もあるが、羽釜か甕の厚手の胴部片がある。杯は内面ミガキ黒色処理されたものである。

これらからは明確に言えないが、10世紀代以降の住居址と思われる。



H29土層説明

- | | |
|--|---|
| <p>1 暗褐色土 (10Y R 3 / 3)
砂質。まれにバミス粒含む。</p> <p>2 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
地山の黒色土1層混じる。</p> <p>3 褐色土 (10Y R 4 / 4)
ローム粒子多い。</p> <p>4 黒褐色土 (10Y R 2 / 2)
ロームブロック含む。</p> <p>5 黒褐色土 (10Y R 2 / 2)
バミスわずかに含む。しまりなし。</p> <p>6 黒褐色土 (10Y R 3 / 2)
大きいロームブロック含む。しまりなし。</p> | <p>7 黒褐色土 ((10Y R 2 / 3)
やや砂質、小石まれに含む。</p> <p>8 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
しまりなし。ローム粒子混。</p> <p>9 にぶい黄褐色土 (10Y R 4 / 3)
ローム多い。</p> <p>10 黒褐色土 (10Y R 3 / 2)
ローム、バミス粒含む。</p> <p>11 暗褐色土 (10Y R 3 / 4)
ローム、バミス粒含む。</p> <p>12 暗褐色土 (7.5Y R 3 / 3)
焼土粒子多量に含む。</p> <p>13 黒褐色土 (7.5Y R 2 / 2)
わずかに焼土粒子含む。</p> |
|--|---|

第36図 H29号住居址実測図



写真40 H29号住居址。右上の窪みが焼土範囲を掘ったところ。(東より)

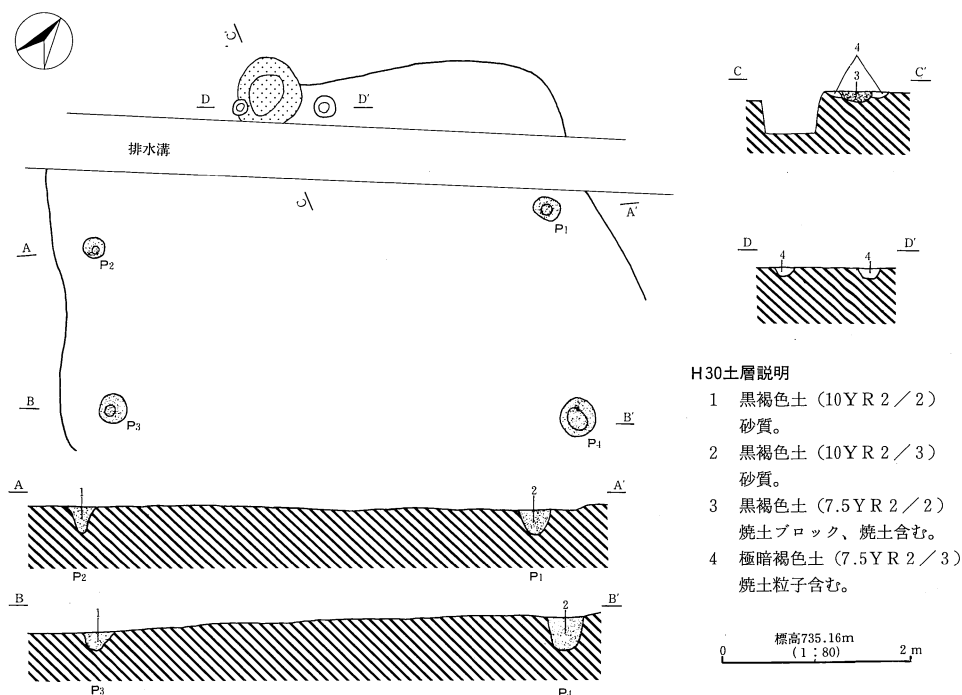
13) H30号住居址

遺構 (第37図、写真40・41)

調査区中央より東、Qあー1グリットにある。H31号住居址と重なり、切っている。F26号掘立柱建物址も切っている。排水溝には切られる。掘り込みの浅い住居址であるため焼土範囲と柱穴のみ検出できた。床面は所々残るが全体にはつかめなかった。掘り方は下の住居址とほぼ同様な土のため、どこまでが掘り方かこれもまたつかめなかった。柱穴は径20~40cm深さ20~32cmを測る。カマドの火床部と思われる焼土範囲は64×108cmである。

遺物

土器片のみで9片ある。図示できるものはない。須恵器片と土師器片がある。須恵器は軟質の杯形土器片1片。土師器は武蔵甕胴部片と杯形土器の内面ミガキ黒色処理されたものがある。これらはH31号住居址の土器とも関連しているので、この住居址年代推定の直接資料とはならないが、H31号住居址より新しく、10世紀代に下るものと思われる。



第37図 H30号住居址実測図



写真41 焼土範囲を掘る。中央のピットはF26号掘立柱建物址。(南より)

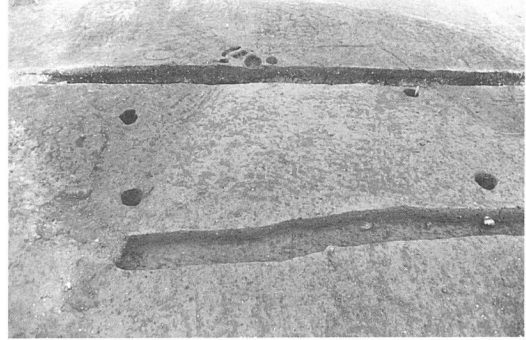


写真42 H30号住居址。浅いため床面はつかみ切れなかった。(南より)

14) H31号住居址

遺構 (第38・39図、写真43～48)

調査区東側中央南端のQけー1グリットにある。H30号住居址に切られ、北西隅を排水溝に切られる。遺構検出面は全体層序第III層暗褐色土である。

規模は5.5×5.3mを測り、やや南北に長い隅丸方形の住居址である。壁残高は、36cmを測る。主軸方位N-15°-Wで北壁にカマドを持つ。覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土、その下の3層は焼土・炭化物粒子を多く含み、ことに北側に点在する焼け石はこの層中のものである。この層上面で火熱を受けた状況がうかがえる。

床面は黒褐色土を主体に黄褐色ロームを混入した土を貼って強く叩き締めている。床下は全体に20cmほど下がる。しかし、構築土層がこのあたりは褐色土であることから13層は地山であるかもしれない。そうすると周辺部を下げた掘り方となるが、つかみにくい所である。柱穴は生活面では柱痕として検出された。径18～36cmを測る。掘り方ではP1が58×36cm深さ62cm、P2が60×30cm深さ46cm、P3は40cm×36cm深さ58cm、P4は64×36cm深さ56cmとP3が円形の他は長楕円形に掘っている。P5は出入口のピットで東西に長径30cmの楕円の中に2個の小ピットを持っている。

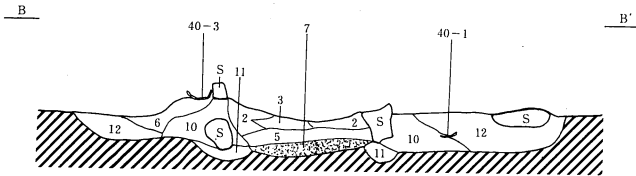
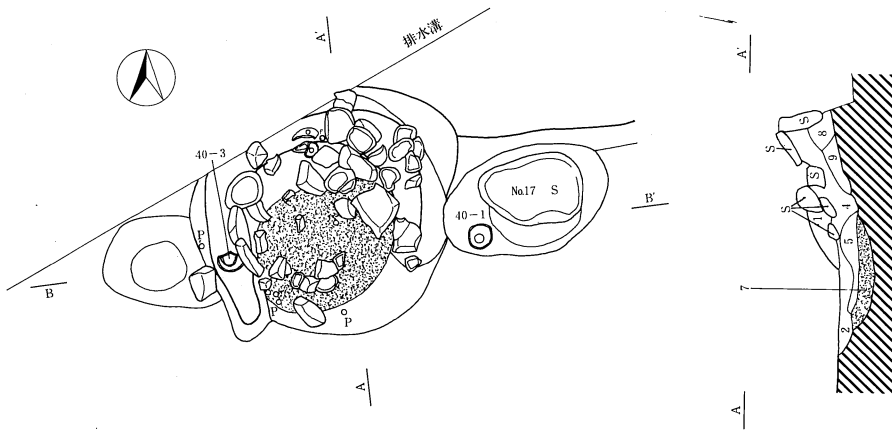
土坑はP2とP3の間、西側中央にあり、長径94cm×84cm深さ25cmの楕円形である。焼土・炭化物が多量に混入していた。

カマドは北壁中央より西寄りにある。西側奥壁は排水溝に壊されるが、残りは良かった。10～20cm大の石を組んで、にぶい黄褐色粘土を貼り込んで構築したカマドである。奥行き132cm袖幅で140cmを測る。カマドの左右にピットを持っている。東90×60cm楕円形で深さ20cm長径50cmの石(安山岩)が伏せてあった。西は54×40cm深さ21cm方形の穴である。

H31土層説明

- 1 黒褐色土 (10YR 2/3)
5~10mm大の小石、バミス粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 (10YR 3/3)
バミス、ローム粒子、小石含む。
- 3 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
焼土、炭化物を多く含む。焼けた多くの礫を含む。
- 4 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
少ししまり粘土粒子(にぶい黄褐色)、焼土、炭化物粒子含む。
- 5 褐色土 (7.5YR 4/4)
焼土。
- 6 黒褐色土 (10YR 2/3)
小石、バミス粒を含む。
- 7 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム粒子多くバミス粒含む。まるでしまりなし。柱痕。
- 8 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム粒子多い。

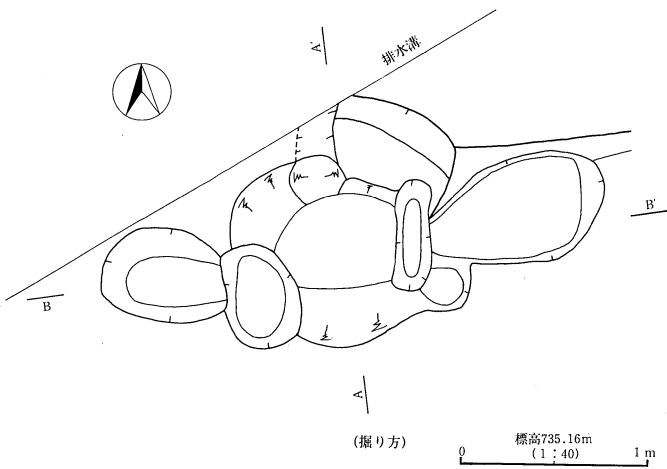
- 9 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
焼土、炭化物粘土粒子含む。粘性あり。
- 10 黒褐色土 (10YR 2/2)
バミス含む。
- 11 褐色土 (10YR 4/4)
ローム粒子多く含む。
- 12 黒褐色土 (10YR 2/3)
黒褐色土を主体にバミス、細かいロームを入れて叩き締めた非常に堅い貼り床面。
- 13 褐色土 (10YR 4/4)
黒味の強いところと黄味の強い所があり、バミス粒0.5~1cm大きく含む。
- 14 黒褐色土 (10YR 2/3)
貼り床と同色でしまりが無い。
- 15 明黄褐色土 (10YR 6/8)
- 16 黒褐色土 (10YR 2/2)
土器片多く含む。カマドの12層と同じ。



○印は土器

H31カマド土層説明

- 1 褐色土 (7.5YR 4/3)
粘土粒子を多く含む。黄味あり。
- 2 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
焼土含む。
- 3 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
炭化物含み黒味2層よりあり。
- 4 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
焼土、灰、炭化物粒子含む。
- 5 灰白色土 (10YR 8/2)
灰白色、灰層、焼土含む。
- 6 暗褐色土 (7.5YR 3/4)
焼土粒子を含む。
- 7 明赤褐色土 (5YR 5/8)
ロームが焼けている。
- 8 暗赤褐色土 (5YR 3/2)
焼土粒含む。ローム粒子少々含む。
- 9 暗褐色土 (10YR 3/4)
ローム、バミス含む。
- 10 黒褐色土 (5YR 2/2)
焼土、にぶい黄褐色粘土2/2、黒色土をブロックで含む。
- 11 褐色土 (10YR 4/4)
焼土含み、しまりなし。
- 12 黒褐色土 (10YR 2/3)
焼土粒子を含む。



第39図 H31号住居址カマド実測図



写真43 H31号住居址。床面は堅く締まっており、柱痕がはっきりとわかった。(東より)



写真44 H31号住居址カマド。カマドは石を組んで粘土で構築したものであった。(南より)



写真45 もっとも多くの遺物が出土し、床面より少し浮いて多くの焼け石があった。



写真46 掘り方。周辺部が低いがいづらか掘りすぎたためはっきりしない。



写真47 カマド火床部を出したところ。(南より)

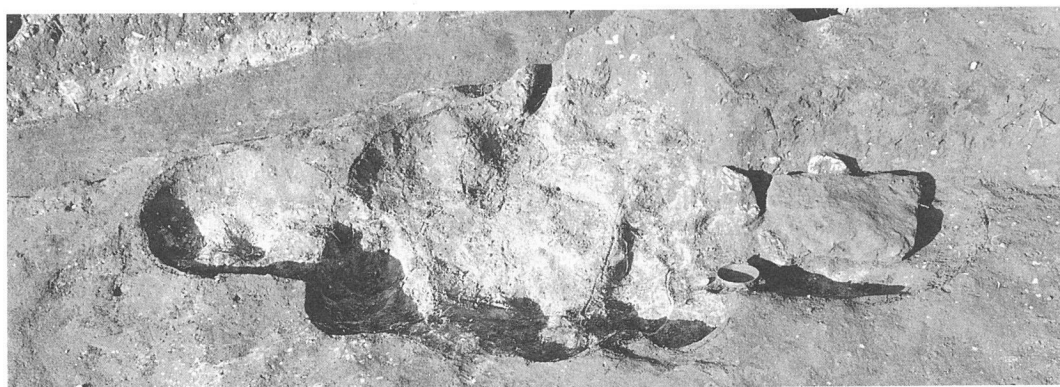
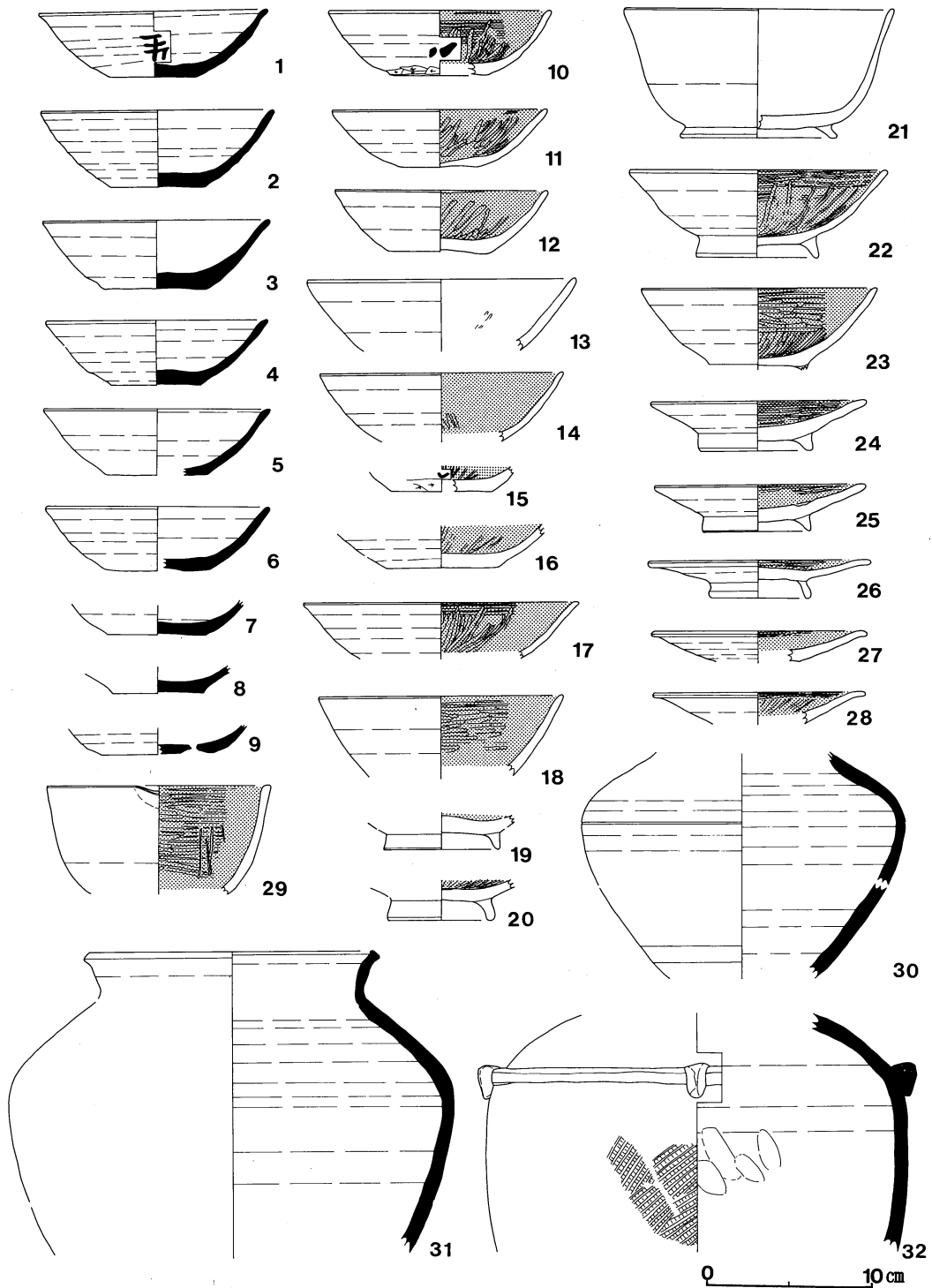
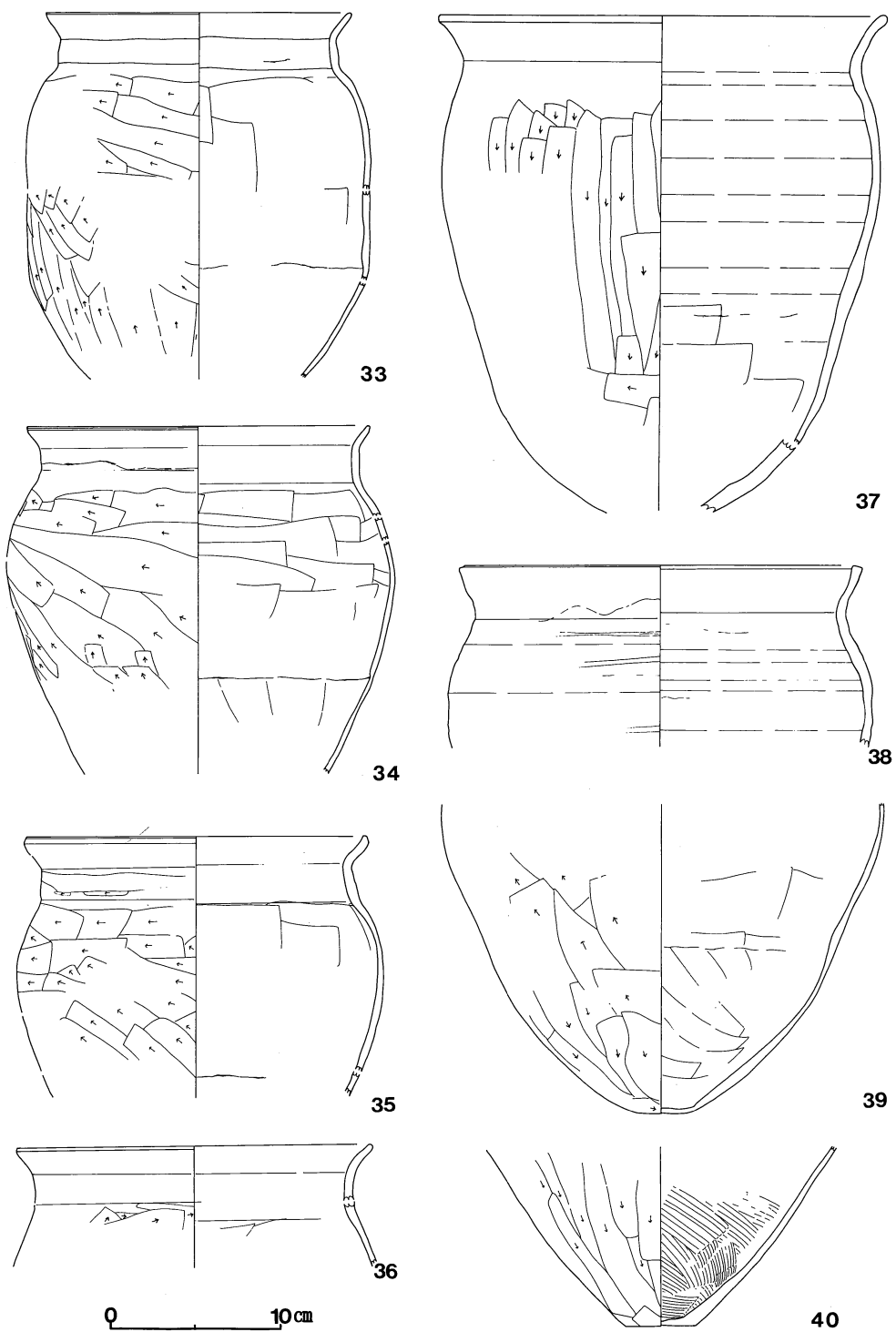


写真48 カマドの掘り方。袖の下は窪み、カマドの左右にはピットがあった。(南より)



第40图 H31号住居址出土遺物実測図(1)



第41图 H31号住居址出土遺物実測図(2)

遺物（第40～42図、図版）

調査区の中ではもっとも土器の出土量が多い住居址である。実測土器個体47個、その他図示できないものが総量で10Kgある。土器類では灰釉陶器、須恵器、土師器がある。鉄製品は鎌、刀子があり、皇朝十二銭の「承和昌寶」が出土している。

灰釉陶器は7片のみで、椀・皿形土器の破片である。胎土は灰色で黒ずんでいる。

須恵器は長頸壺、甕は肩に紐の付く甕（32）、短い口縁の甕、軟質で糸切り底の杯形土器がある。

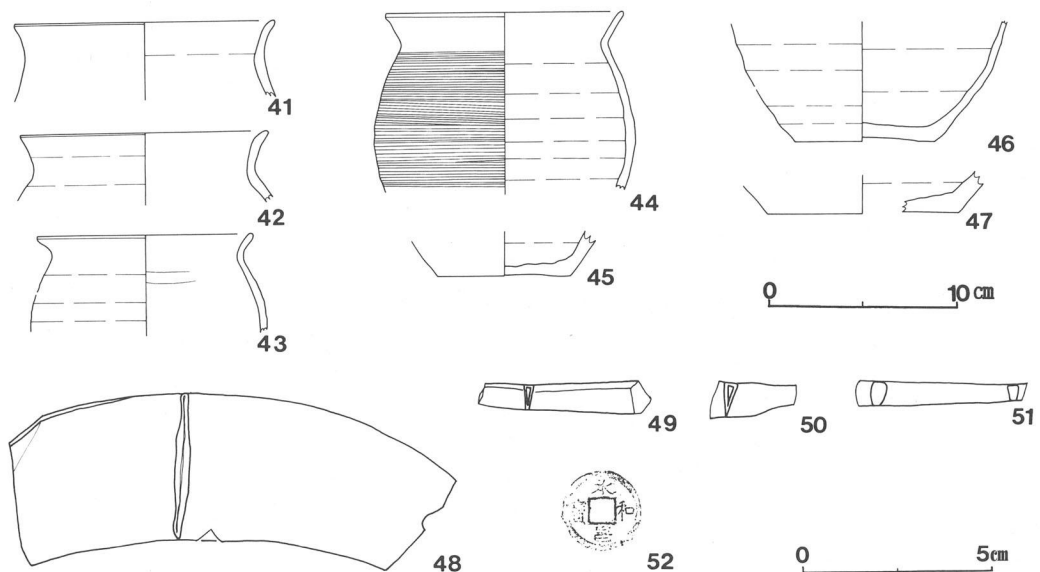
土師器は甕形土器の大小があり、武蔵甕とロクロ甕の両者がある。37はロクロ甕を胴上部より縦方向にへら削りするもので、佐久地域の特色を持つ土器である。杯形土器は内面ミガキ黒色処理されるものである。高台の付く皿形土器もある。内面はミガキ黒色処理される。

墨書土器は3点で1は「生」、10・15は一部残るが判読不明である。

鉄製品の鎌は先が欠損しており、基部から11.5cm残り、幅4cm厚さ3mmを測る。49・50・51は刀子の一部分と思われる。

「承和昌寶」は承和2年（835）に初鑄造されたものである。直径2.2cm内径6mm重さ1gを測る。

これらより「コ」字形口縁の武蔵甕とロクロ甕、須恵器杯と内面ミガキ黒色処理された土師器杯という土器組成から9世紀後半の住居址であろう。



第42図 H31号住居址出土遺物実測図（3）

15) H32号住居址

遺構 (第43図、写真49～51)

調査区東のKく-6グリットにある。ちょうど床面が削られた状態で検出された。全体層序第Ⅲ層中に構築してあり、カマドと柱穴のみを検出した。F38号掘立柱建物址と重複しているが床面が削平されていたため新旧関係は不明である。

床面は不確かながら推定範囲でみると4.5×2.8mで東西に長い隅丸長方形の住居址であろう。



写真49・50 カマドの焼土を掘ったところ(南より)



写真51 H32号住居址。床を掘り下げたところ(南より)

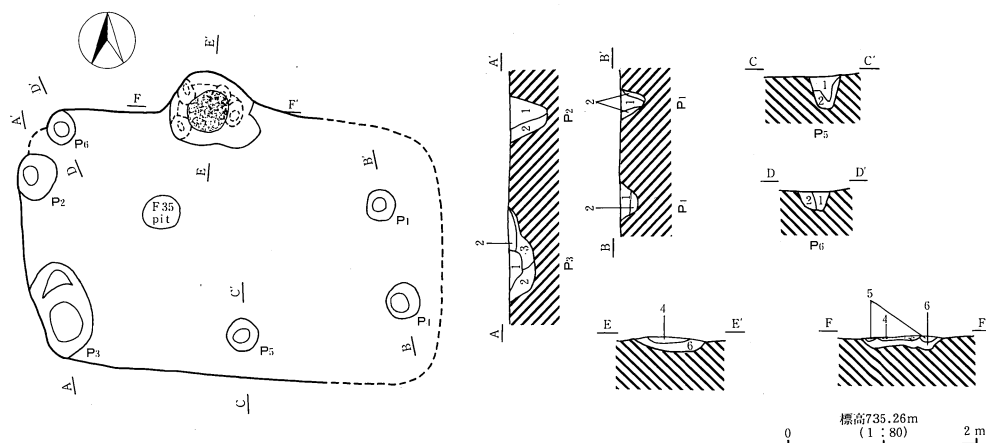
柱穴はP 1 径34cm深さ39cm円形、P 2 長径50cm深さ44cm楕円形、P 3 長径100cm深さ24cm長楕円形、P 4 径40cm深さ20cm円形、P 5 径32cm深さ34cm円形、P 6 径36cm深さ21cmの円形である。カマドと思われる焼土範囲は北壁中央にあり、奥行き80cm、幅100cmを測る。

遺物

須恵器と土師器がある。いずれも破片で、17片を数えるのみである。

須恵器は長頸壺、甕、軟質の杯片がある。土師器は甕では武蔵甕片と羽釜かと思われる破片、内面ミガキ黒色処理された杯形土器片がある。

これらよりこの住居址の時代を推定するのは無理であるが、9世紀後半以降であることは確かである。



H32土層説明

- | | |
|---|---|
| <p>1. 黒褐色土 (10YR 2 / 3)
砂質。</p> <p>2. 黒褐色土 (10YR 2 / 3)
暗褐色の土少ない。</p> <p>3. 黒褐色土 (10YR 2 / 2)</p> | <p>4. 赤褐色土 (5YR 4 / 8)
焼土。</p> <p>5. 暗赤褐色土 (5YR 3 / 2)
焼土多量に含む。</p> <p>6. 黒褐色土 (7.5YR 2 / 2)
焼土粒含む。</p> |
|---|---|

第43図 H32号住居址実測図

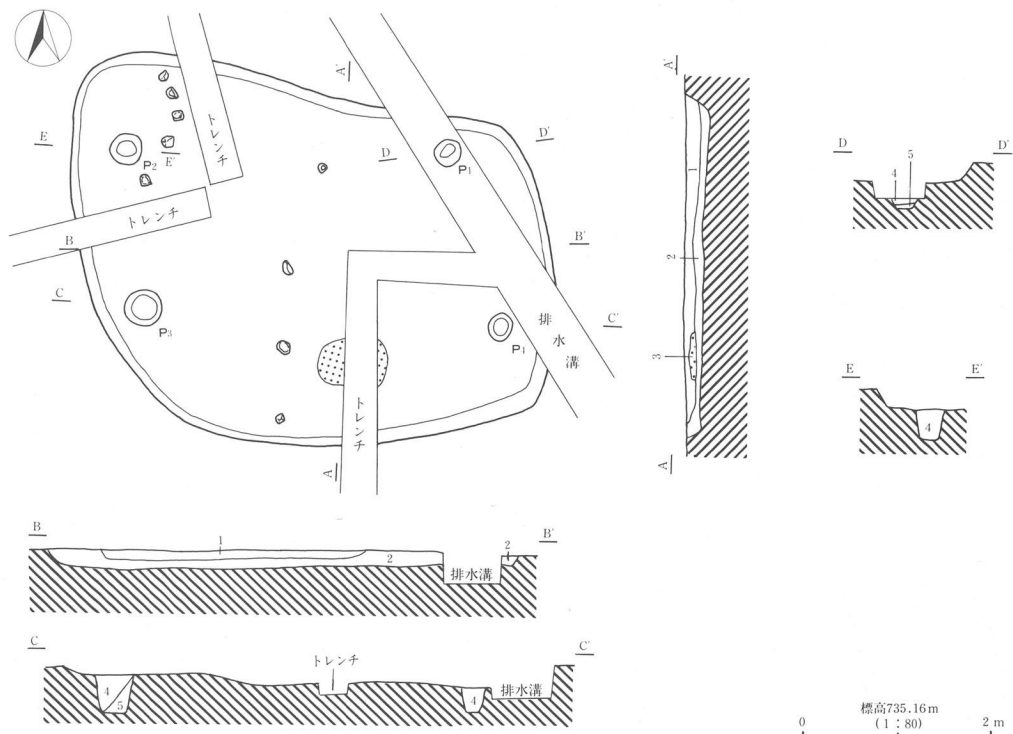
16) H33号住居址

遺構 (第44図、写真52)

調査区東Kコー9グリットにある。下にH34号住居址がまるで重なり、同様な土色の切り合いで住居址のプランをつかみ切れなかった。4.8×3.4mの東西に長い不正長方形を呈す。壁残高20cmを測る。カマド及び火処は検出されない。南側中央床面に灰褐色粘土の固まりがみられた。

床面は少々叩き締められているところもあるが全体的にはつかみ切れなかった。

柱穴は径28cm～40cm深さ30cmを測り、四隅にある。



H33土層説明

- | | |
|---|--|
| <p>1. 黒褐色土 (10Y R 3 / 2)
褐灰色の粘土粒子含む。</p> <p>2. 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
小石含む。</p> <p>3. 褐灰色土 (10Y R 4 / 1)
褐灰色粘土ブロックを多量に含む。</p> | <p>4. 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
しまりなし。</p> <p>5. 黒褐色土 (10Y R 2 / 3)
4層より黒味あり。</p> |
|---|--|

第44図 H33号住居址実測図



写真52

H33号住居址 (東より)
手前に排水溝。床面を確認するためのトレンチが入っている。住居址の形はつかみ切れなかった。
下にH34号住居址が重なっている。

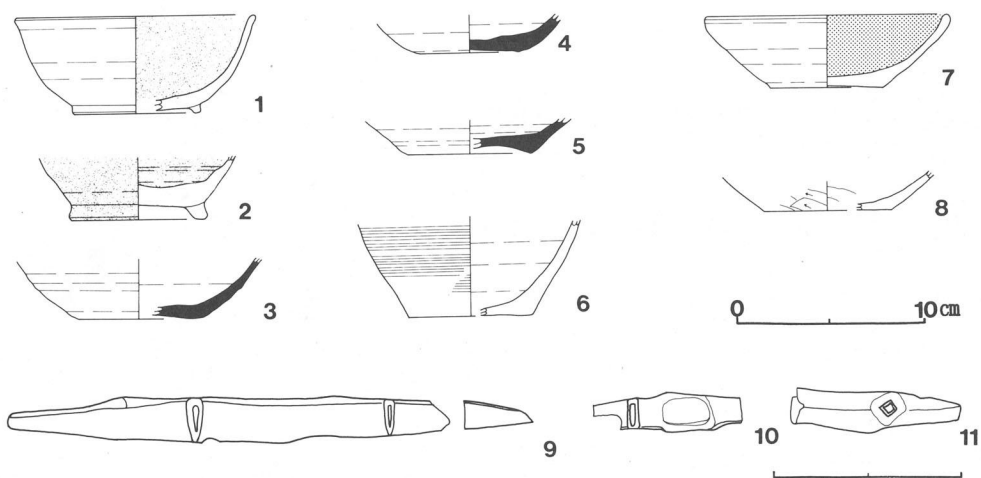
遺物（第45図、図版）

土器と鉄製品が出土している。ただし下にH34号住居址があり、床面が明確につかめなかったことからH34号住居址の遺物が混同している。土器は灰釉陶器・須恵器・土師器がある。鉄製品は刀子がある。

灰釉陶器は図示した碗形土器と長頸壺の底部がある。須恵器は図示した軟質の杯形土器の他に長頸壺、短頸壺、甕類の破片がある。土師器は武蔵甕の破片と図示したカキ目の小型甕がある。杯形土器は内面ミガキ黒色処理されたものである。

鉄製品は刀子と不明品2点がある。

これらの資料からは明確なことは言えないが、H34号住居址より新しいことは確かである。



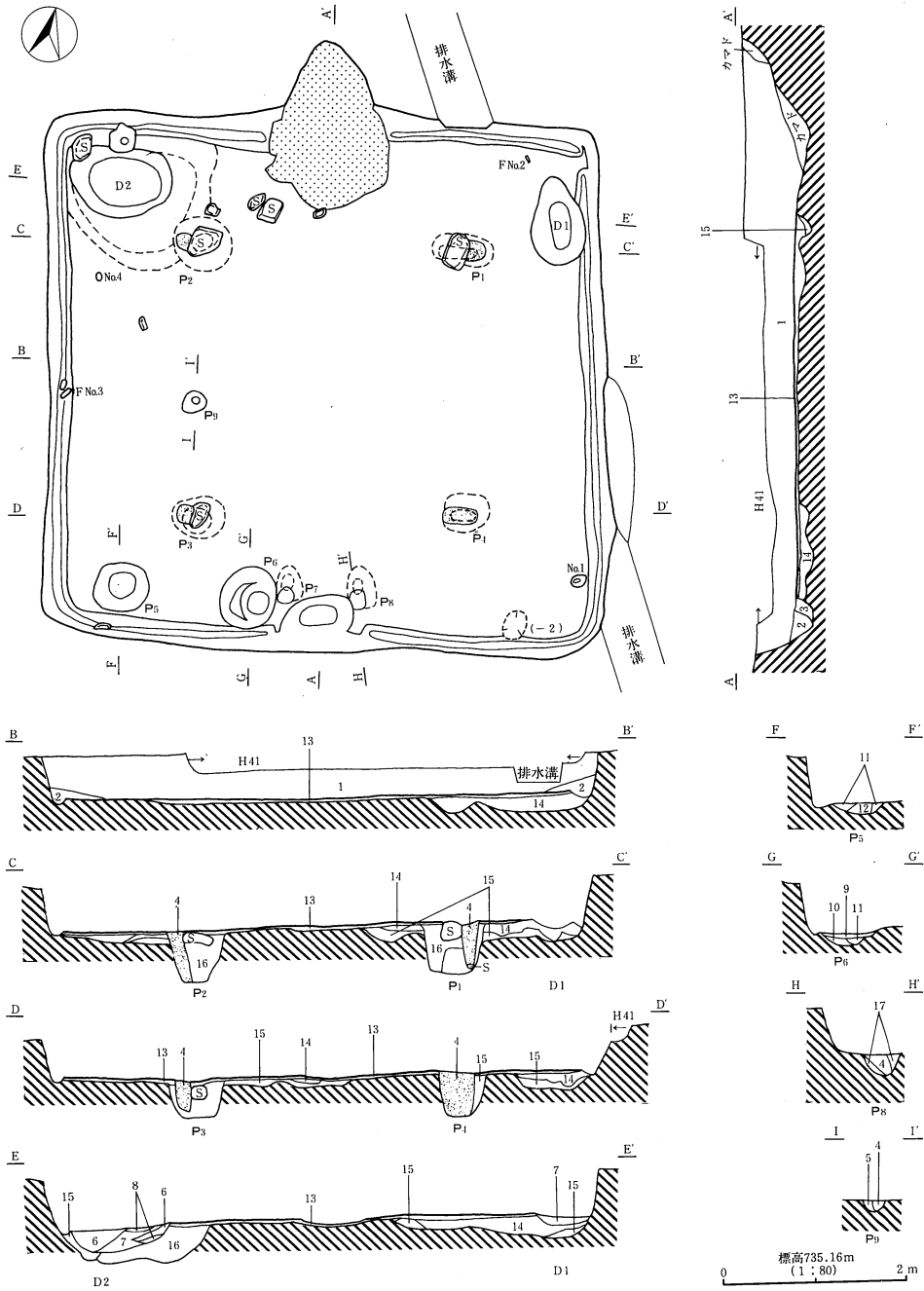
第45図 H33号住居址出土遺物実測図



写真53
調査風景

17) H34号住居址

遺構 (第46・47図、写真54~58)



第46図 H34号住居址実測図

調査区東側中央、K・Lこかー9グリットにあり、H33号住居址に上面を切られている。東側を排水溝に切られている。残りの良い住居址である。

規模は5.7(東西)×5.6mを測り、方形を呈する。壁残高は50cmを測る。主軸方位はN-15°-Wを測る。カマドは北壁中央にある。覆土は黒褐色土である。

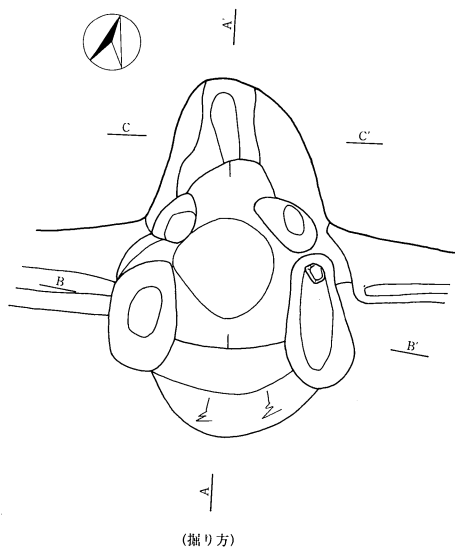
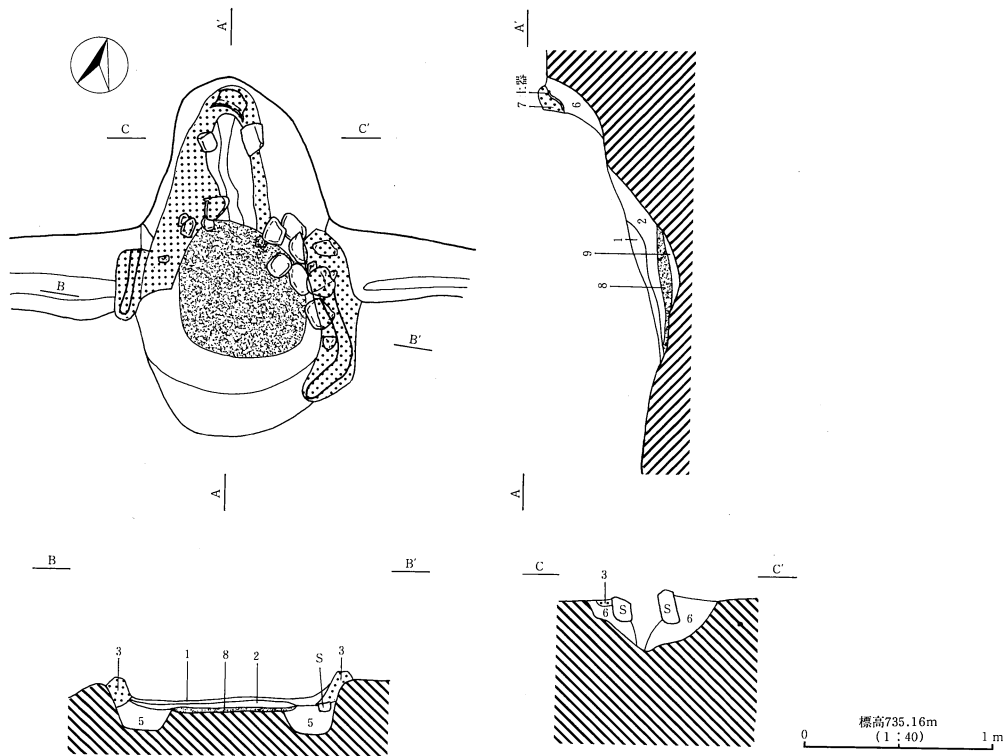
床面は叩きの床で非常に堅く締まった床である。東壁からカマドにかけては床下に掘り込みがあり、幅90cm深さ16cmの溝状に下がり、黒褐色土と黄褐色ロームの混じった土が入っていた。柱穴は床面が締まっていたことから柱痕が明確につかめた。柱痕は径20cmを測る。P1～P3は内側に石を置いてあり、柱を押さえていた様子がわかった。掘り方ではP1は58×30cm深さ60cm、P2は66×58cm深さ60cm、P3は54×48cm深さ40cm、P4は48×40cm深さ48cmを測る。P9はP2とP3の間であって補助柱穴であろう。P7・P8は出入口施設のピットでありP9も同様であろう。P5・P6は西の南壁下にあり、貯蔵穴的な性格のものであろう。

土坑は北東と北西隅にあり、D1は長径96cm深さ12cm楕円形、D2は長径110cm深さ24cmの楕円形である。この土坑は炭化物・にぶい褐色粘土・焼土ブロック・灰と多量の土器片を含むものである。カマドの廃棄物が入れ込まれていたようである。

カマドは北壁中央にあり、天井部は崩壊していたが煙道・袖は残っていた。奥行き190cm幅130cmを測る。にぶい黄褐色粘土で構築し、芯材に石を入れている。煙道出口には武蔵甕を利用したらしく痕跡が残っていた。焼土・灰も残り、火床部は良く焼けていた。カマドの掘り方はカマドの構築方法が良くわかるもので、袖と煙道の立ち上がる所にピットを設けている。

H34号土層説明

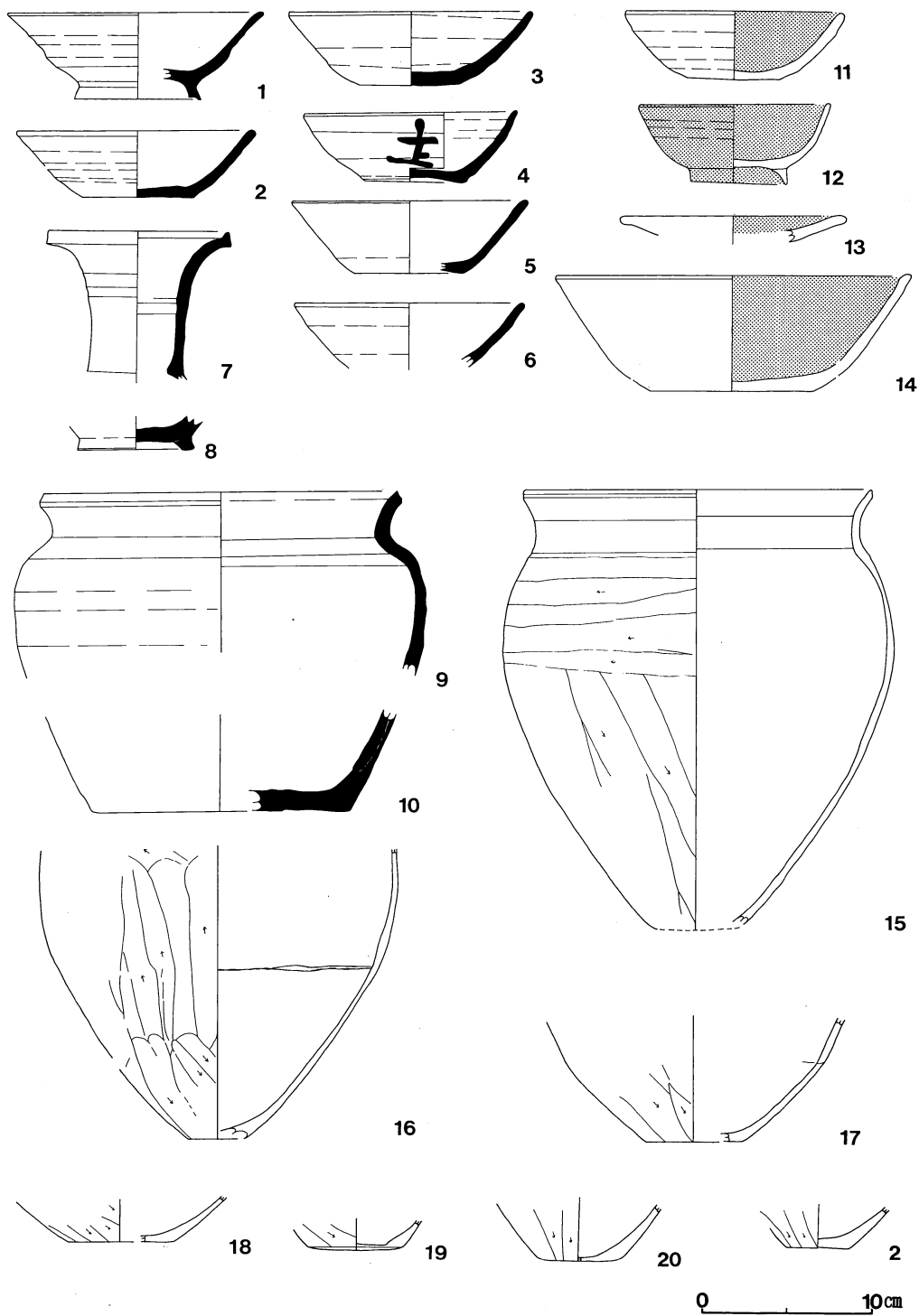
1. 黒褐色土 (10YR 2/3)
バミス粒5mm大中心に含む。
2. 黒褐色土 (10YR 2/3)
黒色土ブロックを含む。バミス少量含む。
3. 黒褐色土 (10YR 2/3)
バミスを含まない。
4. 黒褐色土 (10YR 2/3)
細かいバミス粒含む。柱痕。しまりなし。
5. 暗褐色土 (10YR 3/4)
ローム粒子を多く含む。
6. 黒褐色土 (7.5YR 2/2)
炭水物、にぶい褐色粘土、焼土ブロック粒・灰を多量に含む
粘性有り、土器片多量に含む。
7. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
炭水物、にぶい褐色粘土、焼土ブロック粒・灰を多量に含む
粘性有り、土器片多量に含む。
8. 黒褐色土 (5YR 3/1)
褐灰色粘土層。焼土・炭水物粒子含む。
9. 黒褐色土 (10YR 2/3)
細かいバミス粒含む。
10. 黄褐色土 (10YR 5/6)
黄褐色ローム。
11. 黒褐色土 (10YR 2/3)
ローム粒子多い。
12. 暗褐色土 (10YR 3/3)
ローム粒子多く含む。
13. 暗褐色土 (10YR 3/4)
ローム混合土を2～3cm入れて叩き締めた悲常堅緻な床。
14. 黒褐色土・黄褐色土。
10YR(2/2)と10YR 5/8のロームブロックと黒色土ブロック
混合層。
15. 黄褐色土 (10YR 5/8)
黄褐色ローム。
16. 黄褐色土 (10YR 5/6)
黄褐色ローム黒ずむ。
17. 褐色土 (10YR 4/4)
ローム主体。



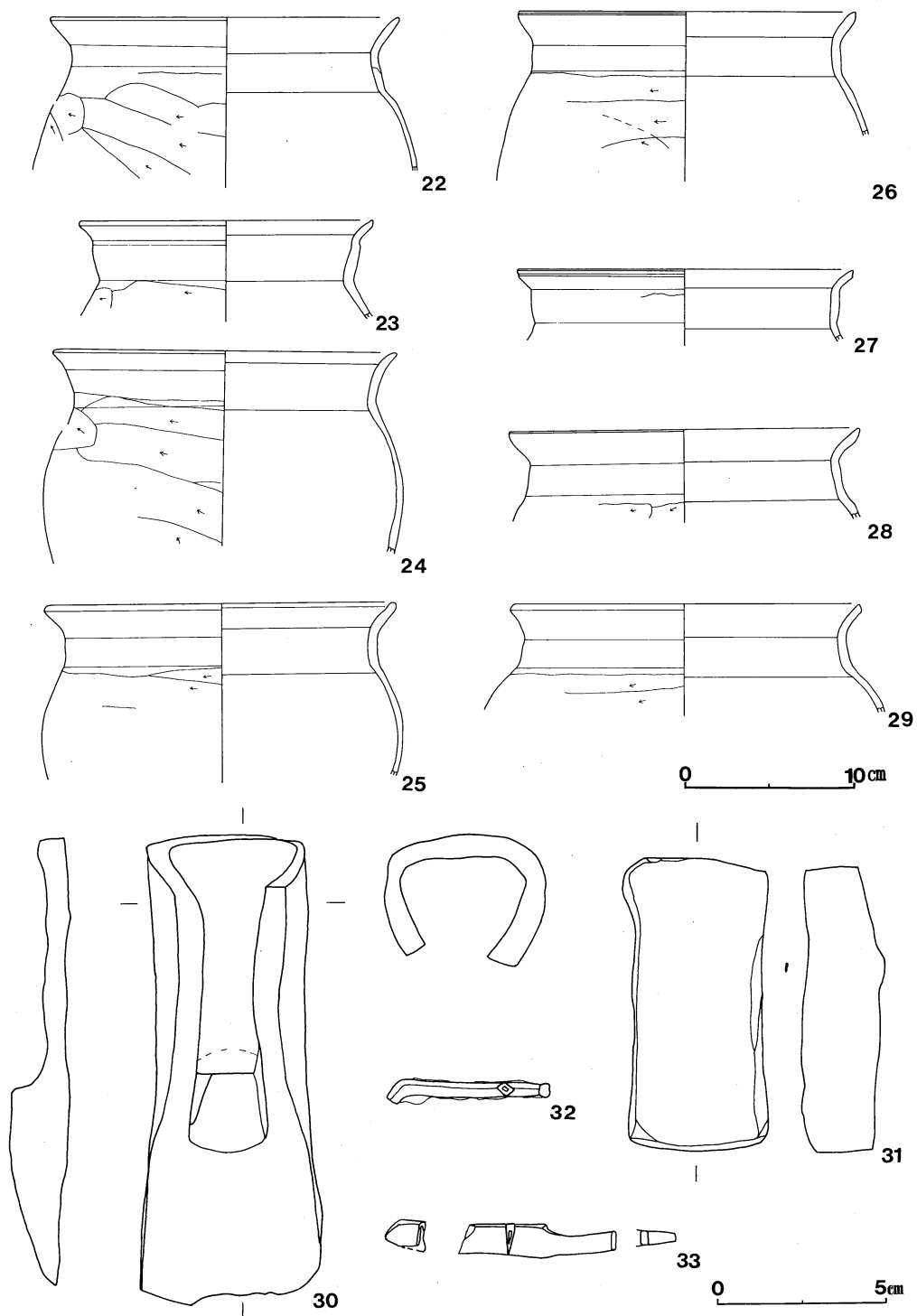
H34号カマド土層説明

1. 暗褐色土 (10YR 3/4)
粘土主体。
2. 暗褐色土 (7.5YR 3/3)
焼土を多く含み灰含む。
3. 暗褐色土 (10YR 3/4)
カマド袖。粘土。
4. 黒褐色土 (10YR 2/3)
褐灰色粘土含む。カマド袖。
5. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
焼土含む。黒みあり。
6. 黒褐色土 (10YR 2/3)
焼土。粘土粒子含む。
7. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)
にぶい黄褐色粘土焼ける。
8. 明赤褐色土 (5YR 5/8)
焼けた土。
9. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
にぶい黄褐色ロームに褐灰色土含む。

第47図 H34号住居址カマド実測図



第48图 H34号住居址出土遺物実測図(1)



第49图 H34号住居址出土遺物実測图(2)

遺物（第48・49図、図版）

比較的多くの遺物が出土している。土器では須恵器と土師器があり、鉄製品では鉄斧と鉄の延べ板、刀子が出土している。

須恵器は壺・甕形土器と軟質の杯形土器がある。土師器は内面ミガキ黒色処理された杯・碗形土器、口縁部形態が「コ」の字の武蔵甕がある。甕は10個体は識別でき、煙道に使用したものが多いが、多くの個体がみられた。

墨書土器が多く8個体もあり、「七」を除いて判読不明である。4と小破片の須恵器外面にあるもの、内面ミガキ黒色処理された杯の外面にあるもの5個体、同じく内面ミガキ黒色処理された高台の付く皿外面の「七」がある。

鉄製の鉄斧は長さ13.8cm刃先幅5.3cm470gを測る。鉄の延べ板は長さ8.6cm幅4cm厚さ2.3cm368gを測る。刀子は折れてしまって全長は明らかでないが、幅1cmを測る。

この住居址は全体に整っており、出土遺物も墨書土器が多い、鉄斧などの鉄製品があるなどこの集落では豊かな家であったと思われる。これらより、須恵器杯、「コ」の字形の口縁、黒色処理の杯等から、9世紀後半に営まれた住居址であろう。1と12・13はH33号住居址の混入品であり、H33号住居址の形がつかみきれなかったことによる。



写真54 H34号住居址作業風景。掘り方の写真撮影をするために清掃作業をしている。（北より）